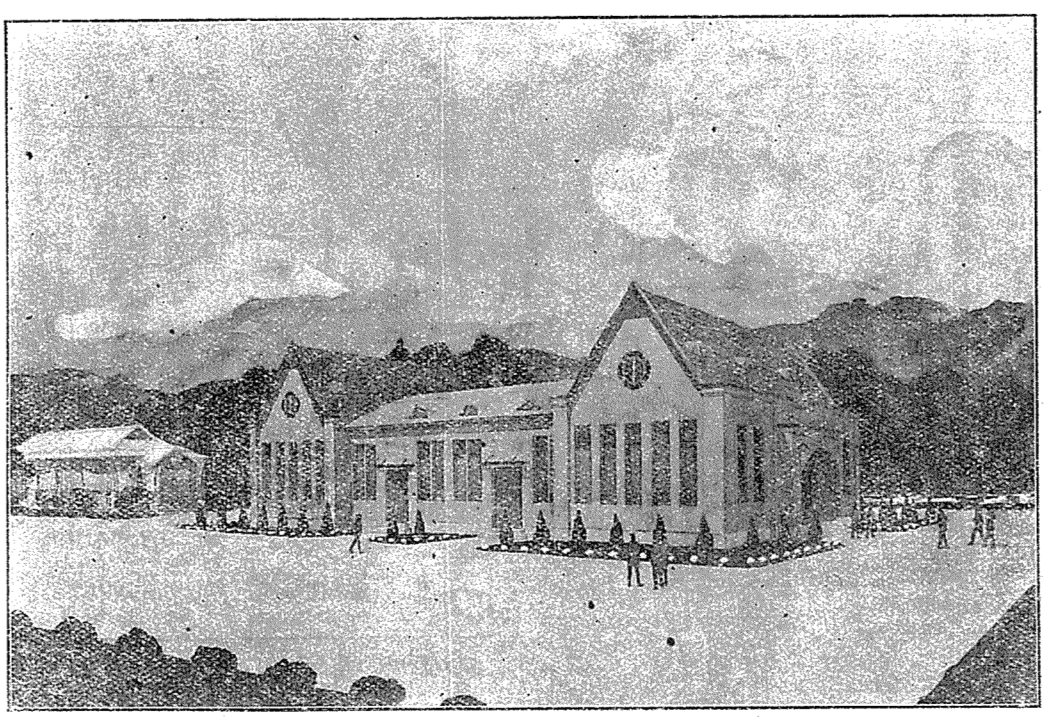
The Kansai University Bulletin

Osaka, April 15th, 1924—No. 18

關西學報

大正十三年　　カント號　　四月十五日發行



近く起工せんとする本學講堂

大阪

關西大學學報局

第十八號

堀佐土話電　一〇四九・五五七〇番

振替貯金口座　大阪一二八七五番

千里山學報　第十八號

目次

挿繪——近く起工せんとする本學講堂—本月二十二日誕生二百周年を迎へるイマヌエル・カントとその肖像—專門部第三十六回卒業式（その一）—同（その二）—大阪ホテルに於ける校友會春季大會—ロリア教授在住のイタリー・トリノ市—レヴィー氏が教鞭を採りつつあるフランス大學

カント哲學の精髓と時代との交渉　關西大學講師　武内省三

學内報——大學豫科學年試驗施行—學部各科學年試驗施行—專門部各科學年試驗施行—岸文部屬の來學—專門部第三十六回卒業式並に大學豫科修了式擧行—專門部入學試驗施行—岩崎教授の歸朝—帝國經濟會議と本學關係者—首藤贊助員の學位受領—武内、辰巳兩氏の轉居—新設本學商學部經濟學科學科課程その他に就て—佐竹理事文政審議會委員被仰付—織田顧問送別會並に京都講師招待會—本學法學部卒業者の高等學校教員無試驗檢定認定—大學豫科入學試驗施行—神宅留學生の轉居—本學社會科學研究會の英文經濟書編纂

校友の面影——石塚大藏氏と木村恭藏氏

校友彙報

本學擴張基金寄附申込者芳名

關西甲種商業學校彙報

ロリア教授訪問記（一）　關西大學教授　岩崎卯一

雜錄——新刊紹介——編輯餘錄

カント哲學の精髓と時代との交渉

關西大學講師　武内省三

一

千七百二十四年四月二十二日カントはプロシヤ王國の東端ケーニヒベルヒの市に生れた。彼の兩親は貧しい小革具商であつたが、その性格は二人共快活で、善良な、敬虔派の信仰に厚い人人であつた。カントの後年の、嚴肅にして、莊嚴なるあの倫理觀は早くから恁ふした兩親の性格、殊に信仰に厚い母の精神と、彼等の愼ましやかな、眞摯な、家庭生活の内に育まれたのである。兩親の感化に次いで彼の性格の上に著しい影響を及ぼしたものは彼の少年時代に於ける教育であつた。當時ケーニヒベルヒの市に於ける敬虔派の主腦者であつたシュルツ博士は早くからカントの一家と交遊を結んでをつた關係から、彼は長ずるに及んで博士の經營する中學校 Collegium Friedericianum で學ぶことになつた。この學校に於ては主として古典の教育と道德的、及び宗教的訓練を施すのを以て目的としたが、その教育なるものも可成り嚴格を以て聞こたものであつた。北海から吹き寄せる霧深い風に年中陰慘に曇り勝ちな北獨逸のこの小都市の内で、而かも幼時から育てられた嚴格な宗教的雰圍氣はごうして小さな魂に決定的な影響を與へずに濟まふ。彼の性格には青少年の時代より南國の人人に有り勝ちな輕快、情熱、絢爛、恣意等の影だも見出し得なかつた。唯專心自己内心を深く掘り下げ、内部生活に沈思することに欣びを發見したのである。

本月二十二日誕生二百周年を迎へるイマヌエル・カントの肖像
上—青年時代のカント
下—その影像

千七百四十年彼は土地の大學に入學した。最初彼は當時既に歿してをつた母の遺志に從つて、神學を專攻する積であつたが、元來彼の多方面に亘る知識慾はこれに飽き足らずして法律、哲學等の學術をも漁り、哲學に關しては當時の正統たりしライプニッツ、ヴォルフの流を學んだ。又特に小壯學者クヌッツェンの感化によつて自然科學に著しき興味を寄せた。彼は文學的才幹にも秀で、學生としては飽く迄も獨創的な研究を喜んだ風があつたと云ふ。彼は自然科學の一般的研究を終へてより、次第に哲學問題に興味を見出し初め、終にその方面に於て大成するに至つたのであるが、最初は自然科學者として學界に立たむとしてをつた。大學の課程を終へてからは家庭教師として生計を保つ傍ら研究を進めその第一の收穫として發表したものは「一般的自然史と天體論」Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels なる注目すべき論文であつた。これは後年ラプラスに依つて完成せられたが、天體の起原を說いたカントの「雲霧說」として今尙ほ名高きものである。かくして才能を認められるるに至つた彼は間もなく大學の私講師としての地位を得、爰に學界に於ける生活は初まるに至つたのであるが、彼の進級は極めて遲遲たるもので千七百七十年五十六歲にして初めて教授の要職を與へらるるに至つたのことである千七百八十一年彼の大著「純粹理性批判」が出版せられ、歐洲の思想界は爰にコペルニカス

的革命を遂げ、各國の碩學、教授にして態態笈を背ふてケーニヒベルヒにカントの教を乞はむとして來遊するもの續續たるに至り、彼の勢望は今や實に沖天に輝く白日にも比す可きものがあつた。彼が相次いで發表した「實踐理性批判」(一七八八)、「判斷力批判」(一七九〇)、「單なる理性の限界内に於ける宗教」(一七九三)、其他の名著雄篇は今や完全にプラトー、アリストテレス、スピノザ等と共に哲學史を飾る最高峯の一つとしての地位を彼に獲得せしめた。我我は然しながらこの華華しき榮光の日の前に彼が沈默と、潛思の數十年のあつた事實を見逃してはならぬ。我我は動もすれば奔放、熱烈なる情熱と、大膽このためにその生涯を數奇なる孤獨、彷徨の内に終へた思想家に懷しむ傾がある。然し同時に古い沼の樣に靜寂なカントの生活、氣高き思想を胸に抱いた眠れる如き彼の冥想、そのものにも尊敬と愛慕の情を禁じ能はぬ。彼の成就した思想的大革命の意義が現代との交渉を論理的に、或は史的發展に於て、公平に檢竅し批判する以前、何かしら感情的にカントなる名に魅せらるる所以のものは、眞摯にして靜寂なる彼の私生活のためであらふ。彼の生涯こそは眞に純學者の典型である。

彼は元來虛弱な健康の持主であつた。彼の容貌風采は肖像畫の示すが如く、可成貧弱なものであつたらしい。身長は五尺足らずの小男で頭の大さは身長との均衡を可成り皮肉に破つておつたさうである。彼の青年時代の寫眞は四十年代の男位に老けて見ゐると書物には記載せられてをるが、必らずしもそれが誇張なりとも思はれざるは彼が終身獨身であつたことが思ひ合はされるからである。彼の精神は本來極めて嚴肅、質實であつたが一方可成り快活で、親切であつた。彼は終生獨身生活を持したが社交の人としても飽く迄質實にして、名門富貴にも媚びることなく、唯少數の賢き友人達と夕餐を共にし卓上種種の談話を交換するを以て唯一の樂みとした。當時嵐の如く歐洲、殊にフランスの社會を搖した自由主義、就中フランス革命に關しては深甚なる興味と同情とを寄せ、食卓を共にした友人等とは非常なる感激を以て卓說を吐くを常とした。然し彼は出來る丈け哲學の問題に觸れることを避けたと云ふ。我我がカントの生活を顧みて何人も最初に奇異に感じ、然る後非常なる感銘を受けるのはこの點である。卽ち彼が常に哲學を口にするを避けたことである。彼が「純粹理性批判」を著はしたる後と雖も大學に於ては常に彼自ら著書の内に於て成立の不可能を證明して辯難攻擊した形而上學とか、或は通俗なる倫理學をのみ敎へて極めて稀に彼自身の新哲學を講述するのみだつたと云ふ。その理由は、彼の哲學は世人の批判を俟つて初めて價値を決定せらる可きであるが故に、未知數なるものを未知數なるが儘に提供して學生の頭腦を混亂せしむるに忍びずと云ふにあつた。彼の學的良心の眞摯さを物語る佳話である。現代に於て、我我はかかる人をジョージ・サンタヤナに見出す。かくカントは交友と會談する以外に、何等の快樂と慰藉とを求むることなく、恋に思索に沈潛した。精神生活が益深まるにつれて彼の唇は益堅く結ばれるに至つた。講義は次第に重苦しくなり、彼が青年時代に示した文學的才幹も釀成し來る新しき思想の難解を明晰に表現し得可き力なく、蹉滯と、不明瞭と、煩瑣とを彼の作物の上に殘した。文豪ヘルデルは嘗て私講師時代彼の聽講生として大いにカントの文學的才幹を稱揚した一人であつたが、「純粹理性批判」の第一版出づるに及んでその表現の曖昧にして、煩瑣なるを批難したと云ふ揷話もある。カントの生涯こそは實に一切を廢して唯唯思索にのみ傾けられたものである。筆者は彼の生活の最も如實なる描寫としてハイネの記述の一節を引用する。

『イマヌエル・カントの生活を描寫することは困難である。彼には通常の意味に於ける生活も歷史もない。彼は東獨逸の國境に偏した、古いケーニヒベルヒの、かけ隔つた靜かな街に機械的な老獨身者の生活を續けてをる。市の敎會堂の大時計ですらその日その日の仕事に對しては、田舍紳士のカントよりはもつと情熱的でもあり、不規則でもあらふ。起床、朝飯、書き物、講義、食事、散步——一切は決まつた時間に行はれる。それで近隣の人達はカント敎授が灰色の洋服を身につけ、手にステッキを携へて、扉を開け「哲學者の途」と彼に因んで名づけられた「しなの木」の小さな並木街に出て行くのを見ると、四時半だと云ふことを確實に知ることが出來た。彼は年中如何なる季節でもその街路を決まつて八度上下に往復する。天氣の惡いときとか、或は灰色の雲が今にも降り出しさうに脅かす日には、年老いた僕のランペが大きな傘を小脇に抱へて心配相に從いて行く。恰度蔭のやうに。彼の外的生活と、革命的な内部の思想とは何と云ふ不思議なコントラストをなしてをることだらふ。實際若しケーニヒベルヒの市民が彼の思想の片鱗だにも理解したならば裁判官の前で感ずると同じ顫を彼の前でなさざるを得まい。けれども單純にして、善良なる人達は彼の内に哲學の老先生たる以外何物をも見出さなかつた。そして彼が何時もの時間に散步するのを見掛けると皆は親しい挨拶を彼に交はす。そして直ぐ懷中時計の時間を直した』と。

彼がかかる規則的な散步の習慣を一生の内唯一度破つたことがある。それはルソーの「エミール」が出版せられた時、その面白さに惹き入れられて思はず散步の時間を忘れたためであつた。彼はかかる單純にして規則正しき生活を繰返し、唯思索三昧に入りつつ、足一度もケーニヒベルヒの小邑より出づることなく、千八百〇四年二月十二日、八十歲の高齡を以て生誕地で逝いた。

二

カントの哲學、特に三批判論に依つて見らるる彼の哲學の最も根本的なる特性は次の三點に要約し得られる。

一、獨斷論の排斥。認識の能力及びその限界の檢竅。

二、先驗的、批判的方法の確立。智識及び文化、卽ち人間活動の全部局に於けるアプリオリの制約の確立。

三、構成主義的認識論の創設。コペルニカス的革命。

カント哲學の全組織内にあつて細緻なる解剖と思索とを要求する諸問題は、その數に於て決して少くはない。又哲學史の發展に於て眞

にカントより生れてカントを修正するに至つた根本問題も以上列擧した三點以外に數多い。例へば彼が漫然列擧した十二の範疇は元來如何なる原理より導き出されたか、又その相互の位序は如何ある可きかを問ふ範疇系統論、物自體の概念、自由の理念、ポスチュレートの眞義、純粹理性と實踐理性との優越關係等は問題自身の重要さに於ても亦近代及び現代哲學への史的發展の導因としても、充分なる考察を費さる可き諸問題である。

本稿は然しながら、その目的をカント哲學の根本的特質を明にし、而かも彼の哲學が如何なる時代的問題の内に生れ、その誕生は如何なる獨創を具へてをつたか、更に又如何なる轉機を時代に與へたかを論究せむことに局限する。個個の諸問題に肉薄することは他の機會に讓りたいと思ふ。

三

近代哲學はデカルトの懷疑的態度に初まる。十七世紀に次ぐ十八世紀は史上啓蒙時代なる名を以て呼ばるる時代であつて、同時代の哲學はその全體を通じて懷疑の色に染められてをつた。懷疑はその性質上單に精神的動搖を意味し、それ自身として何等積極的なる價値を持ち得ないが、然しながら一度着手せられたる偶像破壞の後には暗中に彷徨するが如き懷疑、煩悶の時代を通過せざるを得ないのは必然である。新しき信仰と希望と確信とは破壞の後忙忽の内に建設し得られないのが常である。ルネッサンス時代がクレオ、コペルニカス等の自然研究によつて自然界に向けさせられた人類の眼は、デカルトに初まつた人間精神に對する深刻なる省察を經て次第に吾人の内部生活に轉ぜしめらるる傾向を取り初めた。十八世紀の啓蒙哲學者等は先驅者の道を辿り次第に内部生活に對する解剖と洞察とに鋭利なる研究を重ねて行つたが、その所論は代を經るにつれて次第に懷疑を色濃く彩色しつつ、ヒュームに到つてその極點に達したのである。ロイスが懷疑の効果を論じつつ十八世紀啓蒙時代を懷疑の第四期となした。第ソクラテスの懷疑であつてそはプラトー、アー期はリストテレスの哲學に大成した。第二期はギリシャ末期の懷疑時代でこはキリスト教の信仰を生みローマ帝國に新しき指針を與へた。第三期はルネッサンスにしてそは華華しき文化の輝きと宗教改革とを完成した。第四期は即ち啓蒙時代であつてその懷疑の眼は自然界を離れて人間精神の諸能力、理性、感情、良心等に向ひ、その最後の偉大なる統一は社會的にはフランス革命により、思想的にはカントによつて成就せられたのである。我我は少しくデカルト、ベーコンに初まりカントに進展した人類の思想史を辿つて見たい。

新時代の創造者としてのデカルト及びベーコンは其性格に於て、又其生活に於て著しい對比をなしてをるが兩者を通じて根本的な相似點は鋭い理論的良心の覺醒其ものである。デカルトは一切の實際的關心より離れた純粹窮理に最高價値を認め、他方ベーコンは「知識は力なり」と標榜して智的活動の實生活に對する効果を力説した點に於て、兩先驅者が採つた道を異にしたが、其根本動機を純粹なる智的認識に求めて道德的、宗教的動機に括淡たりし點に於て軌を一にしてをる。ベーコンは四つの偶像を數へて傳襲的偶説に囚はるるの危險を誡しめ、デカルトは一切を懷疑しつつ尚ほ「自然の光明」に倚り「明晰にして判然」clear and distinct たる認識にあらざれば認容し能はぬとなしたことは、共に道德的關心を離れた理論的良心の覺醒の最も鮮明なる表現である。此兩者の主張は學問上全然相反する二大潮流であるが其發生は十六世紀に勃興し初めたるガリレオ、コペルニカス等の自然研究に用ひたる方法に對する省察に源を發した。即ち概念的思辨と綿密なる數理的計算を以て自然探求成功の源なりとし、數學的思惟法をば一切の學に遍通して妥當なる方法となす可しと説いたのは唯理論であり、これに反し直接なる自然觀察、即ち感性經驗を以て一切認識の根源をなすものであるとして歸納論理を説いたものは經驗論であつた。我我は最初デカルトの唯理論より考察を初めやふ。

デカルトは元ジュスエット派の學校に於て習得せしスコラ哲學に不滿を抱き、彼の悟性が確實なりと保證し得る眞理に到達せむ事を志し、第一の過程として一切の懷疑を超越して確實なる何物かを把握する迄一切を懷疑した。此嚴肅なる懷疑の歸着點は彼の有名なる「我考ふ。故に我あり」"Cogito ergo sum" なる命題である。表象内容のすべてが疑はしくともそを疑ふ意識の存在の確實性は懷疑の上に超越して自明である。彼の哲學は爰に最も確實なる第一原理を發見し、次いで神の存在を證明し、本體の二元、即ち物心二元論を立てた。彼が心の學即ち心理學の方面に於ける貢献は決して淺くはないがそれにも優して彼の聲價を決定したものは自然研究に於ける唯理論的方法の確立である。彼は數學を以て最も確實にして、普遍的應用に堪ふるものとなした。彼の深刻なる懷疑を通じて獲得したる第一原理は一切の原理批判の軌範とせられた。即ち我が存在に比較し「明晰にして判然」たる度合に應じて諸原理の確實性を決定し得可しとした。我が存在程「明晰にして判然」たるものは眞理として認容したが、然らざるものは「疑はしい」として拒否した。此方法を彼自身合理的なるものの典型と信じ一切の原理に應用しつつ、彼は多くの確實なる原理、即ち眞理を發見した。本稿の限ある檢竅は一一其正否を確める餘裕を持たぬ。唯我我の注意を要するは彼が此等の原理を取扱つた態度にある。彼は此等の原理を「本有觀念」"innate idea" 或は「永遠の眞理」eternal truth と呼んだのであつた。

「本有觀念」なる彼の思想は經驗派の哲學を刺戟した點に於て興味深き問題である。デカルトによれば「本有觀念」となした諸命題は我我の悟性が然かく認容せざるを得ないものである。數學的命題、因果律、實體性存律、等の諸命題は其適例であつて其目的にして確實なること、我が存在の自明なるにも比す可きである。其確實性は疑ひ得ない。何となればかく認容することは我我の悟性の必然であるが爲めである。此等の諸原理は本來悟性に生得的に本具してゐて決して吾人の感覺によつて得たものではない。心理學的意味に於て經驗に先行し、先天的である。先得的、先天的なるが故に必然である。而してかるが故に其は「永遠の眞理」である。

然らば吾人の悟性が「明晰にして判然」たりと思惟する原理は一切の迷誤より解放せられた

る眞理なりてふ論據は奈邊に求めらる可きであるか、彼の答は「自然の光」なる形而上學的說明である。卽ち其意は人間の有する「自然の光」卽ち理性的なる意識の直接の證明は決して我我を迷誤に導くことを得ない。何となれば人間は惡魔の爲めに欺れて彼の理性的確信が必然的に迷誤へ陷る樣仕組まれてをることありとするも、此惡魔は誠實(veracitas)を性質とする神によつて研究の進行に於て驅逐せらるるからであるとした。

彼はかく理性的意識の直接的證明に智識に對する絕對の權威を許容して唯理論を建設したが其根柢をなす「本有觀念」の解剖には粗笨の缺點を免れなかつた。抑もかかる「本有觀念」は如何にして我我の悟性に宿るに至つたか、又其數は何程ありや、又其適用の範圍は絕對的なりや、或は亦局限せられたる部局にのみ限らる可きや等の諸疑問には觸れる所がなかつた。此偉大なる哲學者が斯くも明瞭なる疑問を顧みることなく、漫然原理の摘出にのみ終つたのは彼の生存した十七世紀が唯「永遠の眞理」の發見にのみ忙殺せられてをつた時代的雰圍氣に煩はされたからであるとはロイスの指摘する所である。

今振顧つてデカルトの哲學に存した主要點を列擧して見やふ。

一、唯理論。

二、唯理的模寫說。

三、本有觀念の生得性。

この唯理論は然しながら次の二つの難點に遭逢した。(一)は第一及第二項、唯理論的模寫說の缺點であつて、抑も經驗に基かざる純粹思惟の表象が如何にして客觀的實在の模寫たり得るやを答ふることが出來ない。(二)は本有觀念に關する缺點で一定の命題が本有觀念として悟性に本具されてをると見ても純粹悟性は如何にして其原理を客觀界に應用することが出來るかを明にしなかつたことである。

英國哲學は此二つの難點を避けむとして經驗論を徹底せしめた。卽ち一方悟性の諸能力は白紙の如く、其が有する表象は凡て客觀的事實より受動的に受け入れたる經驗の所產であるが故に、其が客觀的事實と合致するは當然であるとなして巧に唯理論の第一の難點より逃れんとした。此純然たる經驗論の元にあつては「本有觀念」の先得的存在の否定せらるるは當然の運命である。されば一度「本有觀念」を否定し去つた英國哲學は唯理論者が陷る第二の缺點に對しては全然無關心であり得たのである。然しながら斯く唯理論を征服し去りたりと自ら誇つた經驗哲學は其歷代の哲學者を通じて徹底して行くに從つて、當然の歸結として終には一切認識の必然性を蓋然性に化し去つたヒュームの懷疑的結論に到着した。彼等は今や彼等自身の認識の妥當をすら主張し得ざる自繩自縛の窮地に陷る運命に會したのである。

英國經驗派の哲學はデカルトが未解決の儘殘しおきたる諸問題、就中「本有觀念」の批判によつて發展し、デカルトに次いだ世紀の興味を今や自然研究「永遠の眞理」の發見より人間悟性の能力の反省へと轉ぜしめた。ロックは其始祖である。英國經驗哲學をデカルトに初まつた唯理派哲學に對する反對者として眺むるとき其重要なる意義は主として以下の二點に歸する。一は卽ち「本有觀念」の心理的存在の否定であり、他は唯理論的模寫說に代ふるに經驗的模寫說を以てした點である。我我は此二點に主たる關心をおきつつカントの大修正に會する迂迴り來つた英國經驗哲學の發展の跡に一瞥を投げたい。

ロックは「人間悟性論」の序文に述べた如く一切の哲學的考究の初に當つて吾人の悟性の能力を檢竅するを以て第一の要務なることを洞破した卓越せる思想家である。彼はデカルトの「本有觀念」を排した。何となれば彼は神秘的なる一切の存在を嫌惡したからである。彼は野蠻人や小兒等が所謂「本有觀念」と稱せらるる諸原理につき當初から何等知る所なき事實を例證して、人間の精神が何等の觀念をも先得してをらざること白紙 Tabula rasa の如しと說いた。然らば此白紙の如き吾人の心は如何にして諸原理と智識とを以て滿さるるに至るか。曰く經驗による。我等は本來「本有觀念」を先得すれども當初は意識せざるのみと云ふデカルトの答辯を反駁し、心の本質は意識なれば意識せられずして心にあるてふことの謂れなき所以を冷笑した。畢竟彼によれば吾人の心は經驗によつて書き込まるべき白紙である。重要なるは彼が哲學にかかる心理發生學的なる一局面を展開せしめし點である。

ロックの哲學に於て他の重要なる點は第一性質と第二性質との區別であつた。卽ち認識する心は直覺的に十分なる確實性を以て自己及自己自身の狀態を知る事が出來る。然しながら外界の物體については單に感覺の許容する範圍内にのみ局限せられ、現象の背後に存する「本體」――カントの用語を用ふれば「物自體」――については吾人は何等知り得ない。ロックにあつては「本體」なる概念は未だ保留せられ「存在」すると丈は云ひ得るも其が何であるかは規定し得られない「諸性質の不可知なる保持者」とせられた。此「本體」の本質は認識の彼岸にあるが、然し其存在の樣式は知ることが出來る。此樣式を延長性、不可入性、及動靜となし、第一性質と呼んだ。これに對し色、音の如き個個の感覺は第二性質と名づけられ、唯知覺する心に對し物體の作用する丈の意味を與へた。かくして第二性質に於てロックは感覺の主觀性を高唱したのである。

ロックの研究に基礎づけられた英國經驗哲學は次いでバークレーによつて發展せられた。彼の心理學的分析は主としてロックの第一性質と第二性質との區別を除き去り、前者をも後者卽ち第二性質と同樣に主觀に依屬する觀念に還元する事にあつた。彼はロックによつて「諸性質の不可知な保持者」と說かれた「本體」概念に假定する事の不必要にして、而かも虛妄なる事を說いたのである。彼によれば感覺的經驗の世界は觀念の世界である。花園に咲くチューリップの花は紅に、柔く、且香氣がある。而も此等の諸性質は彼の用語を用ふれば一切觀念ではないか。而かも我に依屬する諸觀念ではないか。彼のかかる鋭利なる觀念化の論法はロックの第一性質の批判に向けられざるを得なかつた。此時の著「新視覺論」に於て、又「人知の原理」に於て、又華麗なる文藻に聞ゆる「三つの對話」に於て極めて明細に此を解剖し批難した。一切の物體は three dimension をなして我我より一定の距離を保つて存在してをる。然しながら我眼より見ゆる距離とは果して何物であるか。我が眼に映

ずるは唯色彩、光、所定の大さを有する諸感覺――バークレーの用語に從へば諸觀念以外に何物もない筈である。我我には距離其ものは見ない。唯其記號のみである。我我は我我の視覺に映じた感覺の助によつて、實際に感覺しない距離其ものを實際存在するかの樣、感覺の背後に望み込むのである。我我は永い經驗の集積により單なる感覺の結合から距離なる概念を創造するに至る。不可入性、運動等の概念にも同樣の事が論ぜられる。爰に於てロックが第一性質として全然主觀より獨立せる地位におきたる「本體」存在の樣式たる諸性質は彼によつて認識主觀に依屬する第二性質と同一視せらるる事になり、物的「本體」なる概念も亦同樣なる運命に會し、客觀的獨立を失ひ、形而上的地盤を覆さるるに至つた。一切は知覺である。知覺が「存在」なる概念を生み出すにすぎない。知覺なくしては存在はあり得ない。彼は此思想を「存在とは知覺なり」"Esse est percipi"なる標語を以て表はした。然らば有限なる我が知覺を止めたるとき宇宙の一切は其存在と秩序とを失ふに至るであらふか。否然らず。神の內に備はる觀念と其秩序とは無限なるが故に我界は決して迷夢にあらずと說いて、一方神の存在を證明し、他方獨我論に陷るを免れんとした。

バークレーのこの學說はロックの第二性質論によつて一面進められたる感覺の主觀性を更らに第一性質迄發展せしめたものであるが、然しながら彼の發展も非意識的本體、卽ち物的本體の界にのみ局限せられたことはたヒュームの今一段の發展を要求した點である。次に精神が單なる感覺の集合の背後に第一性質に見るが如き諸概念を讀み込むに至ることを明にした點は、これ亦後繼者ヒュームの聯想律の思想發展の上に必要なる暗示を與へたものである。彼は眞にロックよりヒュームへの橋渡しであつた。

ヒュームは二人の先驅者によつて開展せしめられた經驗論哲學を其當然の歸着點迄發展せしめ、懷疑論に徹底せしめた近世の大思想家である。彼はロックを繼承して吾人の精神を白紙と見、單なる經驗の記載者となした。吾人の心は印象と觀念とよりなる。印象とは感覺を意味し、觀念とは想起せられたる感覺經驗の謂である。一切の印象も、觀念も經驗からのみ得られる。吾人の心には此等經驗より得られる以外の何物も存しない。彼は更にバークレーが物的「本體」なる形而上的概念を破壞したるに刺戟せられ、意識的本體たる「自我」を大膽に檢索した。既にバークレーが物的「本體」概念の破壞に用ひたる論法を更に鋭利になしたる聯想原理を使用して此大膽なる企圖を成就したのである。卽ち物的「本體」は吾人には印象せられない。唯同一の感覺結合が反復せらるるとき聯想作用によつて斯る概念が吾人の意識の內に發生し來る。而して此原理は獨り總ての非意識的本體に當て嵌まると共に、意識的本體なる自我にも亦當てはまる事を說いた。今やヒュームによつて自我とは要するに感覺の束にすぎないとせられた。

かかる聯想原理は自我の批判以外にも擴張せられ、最も峻烈なる批評を加へられたものは因果律の範疇であつた。古來因果律なる概念は「力」なる概念と共に自然解釋に於ける最高原理とせられ、一切の自然現象が原因と結果との關係に制約せらるる事に何等の疑をも挾まれなかつた。然しながら原因なる一現象と結果なる一現象とは、吾人の感覺にとつては共に前後關係をなして相繼起する二現象に過ぎない。兩現象間に存在するてふ「必然なる因果關係」其ものは感覺によつては印象し得ないものである。我我の感覺の知り得るのは唯現象の時間的關係のみに止まり、兩現象が結合關係の有無、卽ち因果關係の存在其もの及び因果の論理的關係等は全然感覺の領域外にある。然らば斯る因果律なる範疇は如何にして得られたか。ヒュームは聯想律を此に用ひて習慣的に反復せられたる印象が因果律なる範疇を創り出すのであると斷じた。かくして在來一切認識の根本前提たりし一般因果律も經驗的であり、從つて蓋然的たるに過ぎないとせらるることになつたのである。

四

ベーコンに初まりたる英國經驗哲學がロック、バークレーを經てヒュームに至り、必然の歸趨として懷疑論に終つた經緯は大略上に瞥見した。然らばヒュームの懷疑論は如何なる影響を當時の學界に及ぼしたであらふか。其一は形而上學成立の不可能であり、其二は自然科學の基礎の動搖であり、第三は形而上學の不成立の結果來した道德的及び宗敎的信念の動搖であつた。

(一)形而上學の不成立は元唯理的模寫說の根本難點より來る必然の歸結なる事は前述した。卽超經驗的對象を純粹思惟によつて思辨して得た表象が客觀的實在の模寫たり得る事の不可能事たるや明である。これ經驗論によつて唯理論が痛擊された點であつた。(二)然らば經驗的對象の學としての自然科學は奈何。自然科學の根本前提たる因果律や、實體恒存律が上述せる如く單たる聯想に基くものとせられた結果、換言すれば人間精神の恣意なる所產であるとすれば、我我は如何なる權利を以て經驗的對象の一切を因果關係に還元して考察するを許さる可きであるが。從來の自然科學の基礎は今や動搖を來さざるを得ない。(三)更らに道德上及び宗敎上の信念の哲學的基礎を形而上學に置いた同時代にあつては、形而上學の排棄は時代の歸趨を迷はしむるに充分であつた。懷疑論の名を以て呼ばれた彼の大膽なる所說は時代に少なからざる物議の種を蒔いたのである。ヴォルフ哲學に永く醉夢を貪りつつあつたカントは一七七二年ヒュームの此警鐘に依つて醒まされた。彼はヒュームの懷疑論に對して自然科學の基礎を與へ、他方沒落せる形而上學に代へて新しき倫理觀、宗敎觀を立てて時代の向ふ可き歸趨を指さむことを決心したのである。

カントはこの大業を成就せむとして唯理、經驗、兩哲學を巧に綜合し、而かも他面卓越せる獨創力を以て哲學の開拓すべき新局面を開展した。然らば如何にして之を成し得たか。

五

在來敍述し來れる唯理、經驗兩學派の主張を對比すれば次の如きものである。

一、唯理論　認識の根源は概念的思辨にあり
　　經驗論　認識の根源は感覺的經驗にあり
二、唯理論　認識の前提たる諸原理は本有せらる。
　　經驗論　認識の前提たる諸原理は經驗よ

り得らる。

三、唯理論　唯理的模寫主義的認識論。

經驗論　經驗的模寫主義的認識論。

この兩學派の主張の內容は斯の如く全然相反對してをるが、而かも以下の三點に於て共通點が存する。

一、兩學派共に獨斷的なる事。

二、兩學派共に智識問題を研究するに心理發生的なる事。

三、共に模寫主義的認識論である事。

カント哲學の重要なる意義は此三點に關する修正に存した。而かも此修正こそ自然科學の基礎を確立し、他方新倫理觀を指示して依つて以て時代を救濟せむとする彼の目的を實現せしめ得たのである。卽ち

一、獨斷論を排して認識の能力及び其限界を檢竅する事。

二、心理發生的研究を排して先驗的、批判的方法を確立した事。

三、模寫主義的認識論を排して構成的認識論を建設せし事等である。

一、彼によれば元來人類の理性は古往から不思議な運命に弄ばれ自ら形而上學と稱する難問を提げ來つて然も其解釋に苦しんで來た。在來形而上學者等は自說を恃んで宇宙萬象の最終の神秘を把握し得たりと信じ、一切の學の最後の權威者たるを以て自任した。然るに其學說一度覆さるるに至るや紛紛たる諸說は王朝崩壞に會せる民衆の如く諸方に蜂起して學の歸趣爲めに一時全く其所を失ふに至るを常然とする。之れ在來の人類史が幾度となく繰返したる姿であつた。人類の思想史は大略此の二大潮流を辿つて來た。前者は獨斷論者であり後者は懷疑論者である。從來の哲學は主理論たると、又經驗論たるに論なく、認識の能力及其限界を檢竅する事なく唯漫然何等かの前提より直ちに實在の界に徹入し得可しとなした點に於て同一の過を犯して居つた。經驗論は深刻なる思索を一切に向けながら而かも同樣なる獨斷的偏見の下に唯漫然と智識の不完全を指摘し攻擊したのみである。デカルトの唯理論的模寫主義的認識論が到底成立し得ざる所以を說いた節を記憶せられる讀者は、唯理論の獨斷論的なる事を直ちに首肯し得る事と信ずる。然らばヒュームは奈何。彼は因果律の必然性を否定して自然科學の根柢に動搖を與へたが然らば彼の所論は而かく正しきものであつたか。我我は先づ考へねばならぬ。如何なる根據に立つてヒュームは因果律の起原、換言すれば發生原因を尋ねたかと。若し彼の結論する如く因果律なる範疇が果して蓋然的なるものであるならば、卽換言すれば一切の現象を因果關係の內に認識する事を必然的に要求せらるるものでないならば彼は因果律なる範疇を結果として生み出す原因を考へる必要は毛頭ない筈である。彼が聯想作用を原因とし、因果律を結果なりと斷定した其刹那に於て彼は因果律を假定して思索してをつたではないか。彼は此因果律の論理的假定なくしては彼の所說が全然無意義なりし事を覺らなかつた。此兩學派が到達せる結論及び其より由來する人生觀に於て著しき差違を生ずるに係はらず、共に其出發點に於て獨斷論たるに於て徑庭を見ない。唯理論者は認識の諸原理を超經驗的實在に關する部局に迄用ひて認識能力の限界を究めず、經驗論者は經驗に先行する「先天的」原理ある事に思ひ及ばなかつたのである。在來の哲學の根本難點が此に伏在せるを看破したカントは其畢生の努力を此智識、或は理性の考察に向けた。彼の「純粹理性批判」の主要問題こそ實に此理性の到達し得る限界を明確にし、由て以て認識の完全なる概念を建設す可き事にあつた。彼の結論は經驗論の難點を修正し、論理的に、經驗に先行する「先天的」範疇の存する事を示すと共に又他面唯理論に反對して、かかる諸範疇は唯感覺的素材にのみ應用せられ、從つて超感覺的實在に關しては吾人の認識能力は到底及ぶ可からざる理を明にして形而上學の可能を否定した。此の認識の限界を決定せしは彼の一大功績である。

二、然しながらカント自らも正當に述べたる如く智識の考察其自身が哲學の諸問題解決の鍵なりてふ事は既にロックによつて稱道せられ、且貴重なる努力は既に初められてゐた。彼に初まつた英國經驗哲學の歷史は其方向に於ける、卽主觀の內省に關する漸次的發展の跡である。然しながら徹頭徹尾心理發生的研究に終つた事は惜しむ可き事であつた。不幸にして問題の取扱を過つてゐたからである。カントの批判的方法の確立は此心理發生的研究方法に反對して全然新しき方法を提供したのである。カントが哲學史上、不滅の功績として賞揚せられ、現代哲學と最も緊密なる交涉を保つ點は實に此批判的方法の確立にある。「新しい智識元素の發見よりも新しい方法の闡明の方が智識の進步に對しては更らに重要である」とのリールの賞讃は決して的外れの空語ではない。

カントのこの方法は獨り學問の問題に用ひられたのみならず、其及ぶ所道德、宗敎、法律、藝術等人間生活の總べての部局に亘つた。「純粹理性批判」「實踐理性批判」「判斷力批判」及「單なる理性の限界內に於ける宗敎」等は此方法の下に討究せられたる彼の代表作である。

カントはこの新方法を「批判的」Kritisch 或は「先驗的」transzendentale と名づけた。其眞の目的は心理發生的、カントの詞を以て表はせば生理學的と呼ばれたる見方に對して、新しき見方、卽論理的視點を提供するにある。在來の哲學は唯理學派たると經驗學派たるに論なく、共に認識の起原に關する討究に沒頭して、認識の價値、換言すれば所定の認識は認識として普遍妥當性を主張し得可きや否やの問題には全然無關心であつた。起原と價値との差別を明かならしむる爲め卑近なる一例をとる。爰に「愛」なる感情を考察すれば「他人を愛するは本有的感情なり」とは唯理論者の本有觀念の論法である。經驗論者は此に反し「實際に生活して見て初め人を愛する事を習得する」と云ふであらふ。共に「愛」なる感情が如何にして精神內に發生するに至つたかの經緯に答へむとするものである。カントの批判的方法の精神は此等と異なる。「人を愛せざる可からず。愛の發生が先天的たると、後天的たるとは全然問題を構成しない。愛の生活に於てのみ吾人の生活は可能となる。此こそ普遍妥當性を有する唯一の生活であるからである。何となれば他人を犯す事が普遍的原理となるならば我の生活が他人によつて犯かさるるに至るからである。カントの批判的

方法の視點は決して發生的でなく普遍的に妥當なる價値を有する原理を發見せむとするにある事は此比喩によつて首肯し得る事と信ずる。斯く認識の發生に對して認識の價値を、或はザインとしての認識に對してゾルレンとしての認識を對立せしめ、認識の基礎を確立すべき任務を有する哲學の職分は此認識の根據たる「先天的」要素を明かにするにある事を喝破したるは彼の偉大なる功績であり又驚嘆すべき獨創である。

彼がこの方法を名づけて批判的となした理由は、簡單ながら以上の叙說に大略明かにせられたことと思ふ。卽ち認識の起原に關する研究は科學としての心理學が辿るが如く、因果關係の「ミュッセン」に終る。然しながら決してゾルレンを明にし得ない。五と七とを加算して十二となると答ふる兒童の答も、十三と答ふる兒童の答も共に發生の視點より論ずれば必然たる因果關係に制約せられてをる點に於て變らない。前者は平常なる頭腦のなす計算であり、後者は病氣或は疲勞せる頭腦の與ふる答である。共に或る原因より歸結する正當の結果である。心理發生的研究は「原因」Ursache をのみ探求するが「理由」Grund を問はない。何れの答が正しいかなる問題には全然觸れない。若し兩者の內何れか一方が正しく、一方が過であるとなすならば、眞なりや否やを依つて以て批判する標準、軌範を必要とする。この軌範こそ普遍妥當的なるゾルレンでなければならぬ。此ゾルレンに照應せられて初めて認識の價値卽ち眞なるか否やは決定せられるに至る。これ批判的なる命名の意味である。

更に彼が名づけたる「先驗的」、「トランスツェンデンタール」は之と類したる「トランスツェンデント」と區別してカントの用ひたる詞である。後者は經驗を超越するてふ意味で從來の形而上學の取扱ふ超感覺的本體、神、靈魂等を論究せむとするものであるが、トランスツェンデンタールは之と異なり經驗のアプリオリ、卽「先天性」に關する一切を意味する。一切の認識は經驗素材と、形式としての範疇との結合によつて成立する。「形式なき素材は盲目であり、素材なき形式は空虛である」。認識は此兩者を俟つてのみ可能となる。故に經驗の基礎を構成する形式、換言すれば範疇は經驗其物でもなく、又經驗に依つて得られたものでもなく、經驗に卽して、而かも經驗をして可能ならしむる根本的條件である。經驗に時間的に先行するの謂にもあらず。意識の內に本有觀念として內在するの謂にもあらず。唯論理的に條件として先行するを意味する。此意味に「アプリオリ」なる字句は理解せらるる可きである。カント哲學の主要なる努力は屢上に說いた如く斯るアプリオリの要素の檢竅に向けられた。其努力は獨り智識の問題のみに止らず文化の全範圍に及んだのである。トランスツェンデンタールと命名した所以は爰に判明した事と思ふ。卽ち斯る「先天的」要素を究明するを以て本務としたからである。斯くの如く「先天的」要素を究明して、認識成立の基礎を明にし、認識の妥當を批判する彼の方法を「先驗的」、「批判的」の名を以て呼ぶは誠に當を得たものと思惟せられる。我我はデカルト及古代の唯理哲學者の多數によつて使用せられた形式論理による超經驗的方法及經驗派哲學者の心理的發生的方法と峻別してカントの「批判的方法」を理解せねばならぬ。さればカントの「アプリオリ」を心理的遺傳として說明せむとするヘッケルの如き、又フリースの如くカントの哲學を以て認識の性質、起原を論ずるものと見て其方面の缺點を補はむとするが如きは共にカント哲學の正解者にあらざる事を思はねばならぬ。

三、カントの構成的認識論に就いては數多い註譯書があり又總べての教科書中にも詳かなるが故に紙數に制限せらるる本稿は其詳述を省く。唯其大略を云へば我我の直觀の形式たる時間、空間の內に印象せられたる感覺は次に悟性の十二の範疇によつて整理せられ、按配せられて妥當なる認識として成立するに至る。我我の認識は故に決して實在の模寫其物ではない。直觀形式及悟性の範疇等一般經驗を可能ならしむる諸條件こそ經驗の對象を可能ならしむるのである。換言せば經驗は吾人に模寫として外より與へらるるものに非ずして吾人によつて造られる物である。斯く斯くと見せらるるにあらずして斯く斯くと見るのである。從つて吾人が依つて以て一般的經驗を造る可き法則諸條件は對象の經驗につきて妥當であるから又經驗の對象其自身についても妥當でなければならぬ。「悟性は其法則を自然より得るのではない。反つて自然に法則を附與するのである。" Natur ist das Dasein der Dinge, so fern es nach allgemeinen Gesetzen bestimmt ist " 宇宙を法則を以て秩序づけるは吾人の悟性其物であるとはこれカントの構成主義的認識論の精髓である。而して此こそコペルニカスの地動說なる天文學上の革命にも比す可き認識論上の大革命であると彼も任じ、人も許した點である。斯くして初めて經驗科學は確實なる基礎を附與せらるるに至つたのである。然しながら悟性の範疇も唯現象界、卽感覺的印象にのみ適用せられ超經驗的、卽形而上的實在に關しては其適用を許されざるものとなした。カントも亦ヒュームと共に形而上學の成立を斯くして不可能として否定し、心的現象の絕對的主體たる靈魂、外的現象の全體たる世界及萬有の絕對的根元たる神なる諸概念に關して、全然相反せる肯定及否定の兩見解が正等に對立し得る所以を論じ、斯る形而上學的分野をば認識卽智性の界より移して、實理理性及信仰の領域にをき論議多きポスチュレートとして建てたのである。彼はかくの如く一方自然科學の成立を救濟しながら、他方吾人の認識の範圍を局限し「物自體」なる形而上的本體に徹入する權利を拒否したるが故に彼の哲學は亦「現象論」Phänomenchismus なる名を以て呼ばれる。此に彼の哲學の「物足りなさ」が存在する。

批判哲學の創始者として、又哲學の新局面の開拓者としてのカントを極めて大綱に亘つて說いた。次に簡單に綜合的天才としての彼を見たい。卓拔なる綜合者としての彼は科學的認識を可能ならしむる素材としての經驗の必要を力說して超經驗的、形而上學的認識の不成立を說いて經驗論を取入れた。他方經驗を可能ならしむる諸範疇は論理的に經驗に先行する所以を示して唯理論に味方した。然しながら在來の唯理論の論ずる如き心理的なる「本有觀念」の說は直ちに採用せらる可くもない。爰に彼は唯理論者の「本有觀念」を心理的

（以下第一三頁へ續く）

學内報

大學豫科學年試驗施行

去月五日から同十一日まで、本學大學豫科第一學年及び第二學年學年試驗を施行した。

學部各科學年試驗施行

去月五日から同十九日まで、本學學部各科第一學年及び第二學年の學年試驗を施行した。

專門部豫科學年試驗施行

二月二十五日から三月十一日まで、本學專門部豫科各科第一學年及び第二學年の學年試驗を施行した。

專門部各科學年試驗施行

二月二十五日から三月十七日まで、本學專門部各科第一學年及び第二學年の學年試驗を施行した。

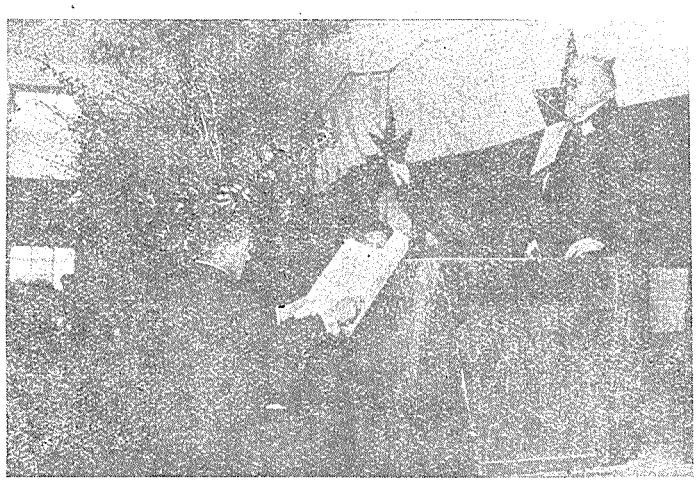
岸文部屬の來學

去る三月十六日、文部屬岸三之助氏が來學せられ、本學宮島專務理事及び木下幹事の案内で千里山學舍を參觀せられた。

專門部第三十六回卒業式 竝に大學豫科修了式擧行

本學專門部第三十六回卒業式は、本學大學豫科修了式竝に附屬關西甲種商業學校第九回卒業式を兼ねて、三月二十日午前十一時から、本學福島學舍に於て擧行せられた。定刻本學校友、理事、教職員その他の關係者は勿論、朝野貴紳の來賓多數參列の下に、先づ國歌の合唱に次で、卒業證書、修了證書竝に賞品の授與が嚴肅に行はれ、山岡總理事の告辭、宮島專務理事の學事報告、垂水關西甲種商業學校主事の學事報告、江木文部大臣(佐竹理事代讀)、中川大阪府知事、關大阪市長(木南助役代讀)、永田大阪商工中心會長、安宅評議員總代、廣瀨校友總代等の各祝詞、綾木專門部在學生總代室石關西甲種商業學校在校生總代の送別の辭、松井專門部卒業生總代及び今道關西甲種商業學校卒業生總代の答辭、中川專門部卒業生總代及び今道關西甲種商業學校卒業生總代の卒業記念品目錄贈呈等があり、最後に學歌の合唱があつて無事閉式した。因に當日の主なる來賓は左の通りである。

大阪朝日新聞記者畑田保次氏、橋本政吉氏、協議員林龍太郎氏、市岡商業學校長堀口米太郎氏、關西日報記者岡中榮氏、日新商業學校長鹿島浩氏、明星商業學校長代理芳野啓次郎氏、田中關太郎氏、大阪府知事中川望氏、大阪商工中心會長永田仁一氏、大阪電報通信社記者能島進氏、協議員黑田莊次郎氏、大阪市視學山桝儀重氏、松島關三郎氏、生野中學校教諭松田一氏、大阪市助役木南正宣氏、評議員安宅彌吉氏、協議員喜多村桂一郎氏、大阪府產業主事鹿野博史氏、校友廣瀨德藏氏(イロハ順)



專門部第三十六回卒業式 (その一)

山岡總理事告辭

私はここに本大學專門部第三十六回卒業證書授與式、同大學豫科修了證書授與式竝に附屬關西甲種商業學校第九回卒業證書授與式を擧行するに當り、先づ以て閣下竝に各位の御貴臨を忝ふしたことを感謝致します。尚ほ、私は本日を以て本大學所定の專門教育を卒へられた有爲多望の諸君に對し、又本大學大學豫科の科程を終つて一層學問の蘊奥を究めるために學部に入らんとする諸君に對し、又附屬關西甲種商業學校の實業教育を卒へられた新進氣鋭の諸君に對し衷心慶祝の意を表するものであります。專門部卒業生諸君、元來我日本に於ては、卒業と云ふことを、その文字が示す通りに過去の學生生活から見て、業を卒へたと解してをります。然しながら、長い人生の全體から見るならば、寧ろかくの如き機會には、英米の大學に於て稱せられてゐるやうに、社會的生活への門出と解する方が意義ある見方であると私は思ふのであります。卽ち諸君が本大學に於て修得せられた學理を本當に實化すべき時期が、いよいよ今日から始まるのであります。從つて本大學の業を卒へたと云ふことは、諸君に安堵の息をつかしめることではなくて、却て更に一段の緊張味を以て新なる生活過程へ入らしめることを意味すると言はなければならないのであります。

私の考へるところを以てすれば、教育ある人と然らざる人との相違は、總ての活動に於て、前者はその知つてゐるところを實行するか、或はその爲しつつあることを自ら意識し、合理化することが出來るに反し、後者は多く盲目的、機械的に行動するに過ぎないと云ふ點にあるのであります。この意味に於て、既に教育ある人としての社會的評價を贏ち得るだけの資格を得られた諸君を祝福すると同時に、この評價を裏切らないだけの自重と努力とを希望する次第であります。

大學豫科修了生諸君、諸君とは今後尚ほ度度お目にかかる機會もあり、又教職員諸氏の指導誘掖の下に、更に本大學に於て學生生活を續けられるのであるから、多くを申上げる必要はあるまいと思ふのであります故に本日は學問研究に入るの準備が整つて學部に進まれるやうになられたことを祝すると同時に、今後一層の奮勵を希望するのみに止めて置きます。

關西甲種商業學校卒業生諸君、諸君の中には更に進んで高等の學校に學ばれる向もあるであらうが、多くは直ちに實業界に入つて活動を初められるものと思ひます。而し

て今や實業界に於ては一般に人才の輩出を以て、その緊切なる要求の一としてゐると認めることが出來、專門部卒業生諸君と同じく前途有望であることを愉快に思ひます最後にこの實社會に出でんとする以上の卒業生諸君に對し、特に附け加へ申上げたいのは、諸君が本大學及び三千有餘の本大學卒業生諸氏を、その背景にもつてをられると云ふことであります。このことは、諸君が社會活動の上に於て特に有する幸福なる點であつて、凡ゆる目的を達せられるに極めて偉大なる後援となる次第であります。がこれと同時に、本大學及びこれ等の先輩諸氏に對する諸君の責務も亦頗る重大であることを十分自覺せられんことを希望して已まぬのであります。諸君幸に自重自愛あらんことを。

關西大學總理事　山岡順太郎

受賞者氏名

卒業成績優等につき賞牌一箇賞與

專門部法律學科　松井理一郎

同佳良につき賞牌一箇賞與

專門部商業學科　中川吾一

同佳良につき山本奬學資金により賞品授與

大學部商業學科　森川太郎

同　經濟學科　谷岡格

專門部法律學科　松井理一郎

同　稲井義夫

同　村松鐵次

同　加地良七

專門部經濟學科　小西直意

同　商業學科　中川吾一

同　新田巖

大學豫科修了成績佳良につき山本奬學資金により賞品授與

久保英一　永井勝志　野原修五郎

卒業生氏名

大學部法律學科

林　和四郎　長井鹿義　嚴大覺

小泉重信　溝手二二

大學部經濟學科

亥野貞吉

八田薫

谷岡格

大學部商業學科

畑　孝二郎

西宮辨眞

坪郷芳介

氏田藤平

松原典七郎

小林一雄

江口透

森田仁一

森川太郎

專門部法律學科

伊藤正雄

石山三治

稲井義夫

岩瀬竹太郎

伊賀利夫

伊藤茂太郎

林　利作

林　敏夫

花立勘

西村繁雄

星田九一

岡野廉平

岡本亮一

六藤薫太郎

長谷川安治

畑浦濟美

西山正雄

西川七三

土井吉光

岡本勝治

大木田關哉

初瀬靜雄

原田孫吉

羽田野久夫

西川武夫

本田捨松

德野捨三

小川言吾

緒方清

若山資雄

加藤謙次

神澤周軌

加藤正次

加地良七

香月實

吉田鹿之助

吉村富太郎

和田一佐

金星武三

川西榮次郎

柏原能心

鎌田正熊

片岡晴磨

吉川義治

武内保夫

田中清太

谷岡登

角谷五郎

都野守良雄

永吉喜定

長島重五郎

中島一郎

仲渡七兵衛

中西司郎

村松鐵次

野村楠男

野田増穂

草野忠男

楠山秀太郎

隈部勝

矢野秀雄

山口行太郎

山上義夫

松井理一郎

藤井正雄

福田松彦

福田元

小橋正男

宍吹好雄

赤松佐一郎

笹野寛

柏迫春三

神谷虎男

川瀬正憲

香川一男

蒲原喜一

刈谷明忠

横山四郎

田中庄次

田中仲五郎

田邊芳市

曾我部軍次

妻木信一

名越日月

中井吉輝

長手米吉

南光義治

宗内正

植田二郎

野田健太郎

日下芳太郎

桑原正男

黒才實

山邊直儀

山本京介

山本文助

松岡爲吉

増田義一

牧瀬健吉

深井湛

淵上叉

小松勝馬

江口忠夫

朝山峻勵

淺野樹雄

佐藤富佐夫

專門部第三十六回卒業式（そのニ）

壇上は文部大臣の祝辭を代讀しつつある本學竹佐理事

松山多三郎

松田正義

古塚勘助

福岡多賀義

小盛濱次郎

淺川靜一

在里三芳

笹岡傳平

佐瀬憲治

北後義一

岸田富藏

岸本岩次

道行敏郎

白井源三

下村吉丸

土方一男

畝川正夫

杉本幾太郎

坂口軍司

木本重雄

菊農正太郎

金鐘馗

三谷龜太郎

下山喜久平

久田一榮

森下喜藤

杉本米善

木村敏太

岸芳一

木村松治

三橋芳實

宮本勇男

志賀潤八

廣實都雄

森本尚

關清成

關國男

專門部經濟學科

井上孟

伊木貞市

西田重太郎

床分松藏

富田貞督

小野藤平

片岡博

吉田正義

園田豐

成田剛雄

桑田龜之助

圓尾寅雄

增子一巳

福島秀正

江尾兼榮

朝原正

櫻井喜三次

岸田正雄

望月靖彦

井阪恭一

岩崎清

新田武夫

富山忠三

岡崎英夫

上村行一

玉置衛

壺内敏夫

中西政之助

山本喜祐

松本晃

二川敏之

近藤政士

阿部正一

佐津間秋夫

木村隆

谷位一夫

中村簡吉

上野元明

増田定治

松浦弘

藤田信雄

小西直意

荒井品三

酒井鶴之助

絹田英一

庄司佐兵衛

諏訪賢三郎

井上巧

西村達

細田茂雄

德田琢磨

岡崎英夫

金田定吉

谷次郎

專門部商業學科

井上定次

岩田卓止

池田要二郎

服部正作

西田正義

堀四郎

泉正次郎

飯田種次

羽根嘉秀

八村守雄

新田巖

頓戸勇

乾英一

岩崎懷也

原田誠晃

蟻木茂驥

堀茂一郎

岡村順藏

岡本卯作　沖原力　奥村宗三郎
大久保鎚造　脇博　神田明次
柿澤貞光　河南義雄　加治信一
吉見直枝　米田信太郎　田野德右衛門
田中浩道　瀧井嘉藏　瀧口守義
田淵昌平　田中八藏　壺田倫夫
堤正儀　中村利雄　中村卯之助
永井鐵士　長尾好雄　中川吾一
中野敬三　中山幸市　永田傳一
中谷政男　向井重太郎　室田清二
浮田時太郎　梅川喜代造　上田安久
倉本永太郎　葛目成忠　國友重義
山口榮次郎　安居秀雄　山本定一
八尋次助　山中林三　山下末夫
松本徹　正木文夫　桝岡正太郎
藤本壽哉　藤井了源　藤本清一郎
藤澤一生　合田柱二　遠藤孝司
芦田茂里男　青木茂　青木由郎
佐藤彌　齋藤喜市　佐藤芳太郎
佐竹圓洲　阪下保　佐々木信敏
京橋勇　岸本忠雄　木下源三郎
北川勝藏　北元四郎　簑田二郎
三好友一　三井清市　南長之助
霜村盛鄉　篠原國隆　清水一良
守山鼎吉　關本善和　須藤國雄
杉之原正雄　鈴木一郎

大學豫科修了生氏名

伊藤又治　石田末夫　猪之口重男
石渡俊一　池本彌太郎　石岡勇四郎
井上清武　萩茂雄　林清一
濱本信雄　原谷爲一　阪東政一
橋爪滿彦　畑威夫　林太郎
西川專三　西田滿治　西原新太郎
西村晃　堀田與五郎　堀川金藏
戸張昇　戸川喜夫　張應善
近田一夫　大野矩雄　大石良一
岡村育次郎　奥野忠夫　奥谷伊作
大北朔郎　大塚魚一　脇房助
川西千次郎　片山脣　上村靜馬
金谷勇　蔭山正一　川長哲二
川合淳　片岡孝治　片川大二
金政卯一　芳原楳一　四辻詮
武田貞一　田端準雄　竹割寅之助
種谷喜造　谷原九三藏　谷内宗一
塚本一三　永井勝志　中村良之助
中野勇次郎　浪江源治　中島平吉
中尾好太郎　永田敏清　村井健藏
上村義夫　植田健　植野壽夫
野原修五郎　久保英一　國松佐太夫
桑原敦治郎　山口常一　山田義雄
山下喜代志　山池浩　安井幸得
松谷哲藏　牧忠勝　藤井鼎藏
福田義雄　札野茂次　藤野楠之助
小森龍　小松金重　江里口正行
秋山源藏　明石輝夫　東茂
佐野登喜雄　阪井親　坂口敏郎
齋田耕助　北野爲吉　木戸四郎
木下恒雄　菊川博　三木蕊
三木善夫　三宅一之　澁谷良藏
柴田源之助　久村英夫　日根太郎
毛利常次郎　杉崎道雄　鈴田貞三
菅原正浩

以上合計百三名

江木文部大臣祝辭

本學は創設以來三十有八星霜を閲し、當地に於ける唯一の法律學校として漸次健實なる發展を遂げ、斯界に貢献したる業績頗る大なるものあり。大正十一年六月本學が大學令に依り設置せられしより居然たる私學一方の重鎭として益邦家教育のために寄與しつつあるは誠に感謝に堪へず。茲に本學專門部第三十六回卒業證書授與式を擧行せらるるに當り一言祝意を表するは予の欣幸とするところなり。

卒業生諸子、諸子今や本學專門部の課程を卒へ各その志すところに向はんとす。その道程なるべしと雖も力を邦家のために致すは即ち一なり。惟ふに帝國目下の事情は客年大震火災の後を受け大に先づ精神を作興すると同時に物的損失を恢復して、更に國力の伸張に努めざるべからず。これ誠に一日も國民の倫安姑息を許さざるの秋なり。故を以て社會が新進氣鋭なる諸子に期待するところは頗る大なりと謂ふべし。予は諸子が徒に新を逐はず又舊に拘はれず、着實穩健なる思想の上に立ちて業務を勵み智德を涵養し、他日に大成して本學教養の趣旨に副はれんことを望むや切なり。これを以て祝辭とす。

文部大臣　江木千之

中川大阪府知事祝辭

關西大學專門部本日を以て卒業證書授與式を擧行せらるるに當り一言所懷を述ぶるは予の欣幸とするところなり。

惟ふに方今列强競ふて力を學術の研鑽と人文の開發とに傾注して維れ日も足らざる時に當り、諸子茲に本學の課程を畢へ專門の學術を修め將に出でて社會の實務に膺らんとす。これ獨り諸子のために賀すべきのみならず又邦家のために慶すべきなり。

然れども學問の道たる愈進みては愈遠くこれが運用の途亦複雜多端なり。諸子若し今日の榮譽に安んじて自ら研鑽修養の途を怠らんか日進の社會に先進者たるを得ざるに至るべし。

冀くば諸子宜しく將來忠實業に從ふと共に知識の擴充と人格の向上とに努め社會の進運に伴ひ天職の才能を盡し以て國運の伸張に貢献せられんことを。聊か希望を述べて祝辭とす。

大阪府知事　中川望

關大阪市長祝辭

本日茲に關西大學專門部第三十六回並に關西甲種商業學校第九回の卒業證書授與式を擧げらる。惟ふに本學創立以來校運年と共に盛にして、その間幾多の人材を教養し文運の進歩に貢献せられたるところ甚だ大なり。今この盛典を擧げ更に有爲の人材を輩出せられたるは單り本學の聲譽たるのみならず邦家のため洵に欣賀措く能はざるところなり。それ文化の進展はその歸するところ、これを教育の振興に俟ち以て青年の智德を向上せしむるにあり。輓近世局の大勢愈文明の根柢を涵養するの最も緊切なるを覺ゆるの時に當り、卒業生諸氏は多年研鑽の功積まれ智德共に進み將に社會の實務に就かれんとす。諸氏の前途や多望なりと謂ふべし。冀くは諸氏益その志すところを操りて將來の大成を期せられ以て本學教育の本旨を完くせられんことを。一言を叙して祝辭とす。

大阪市長　關一

校友總代祝辭

螢雪の努力を重ぬることここに三星霜、目出たく本學の業を卒へて實社會に出でんとする諸子の門出を壯ならしむるために擧行せられた本卒業式に列し、一言慶祝の意を表し得るのは、吾人の以て最も欣幸とする

こころである。

諸子はその學問的研究に於て、その人格的修養に於て、學生として既にその最高課程を卒へられた譯である。然しながら、諸子が將に入らんとする實社會の事情より見れば、永き人生に於ける一里塚を漸く通過したるに過ぎざるかの感ある程諸子の前途は尙ほ多事にして且つ多望である。

冀くば諸子が今日の光榮に眩惑して人世の能事終れりとなすことなく、本學に於て得たる力强き基礎の上に、更に九仞の泰山を完成すべく努力せられんことを、單り諸子自身のためのみならず母校のため、將た國家社會のため希望して已まぬ次第である。

關西大學校友總代

在學生總代送別の辭

本日を以て本大學專門部第三十六回卒業證書授與式を擧行せられ、卿等多年刻苦黽勉の功成り、ここに卒業の榮冠を戴きて將に校門を辭せられんとす。卿等の欣快何物もこれに如かざるや勿論、生等在學生一同の亦洵に慶祝に堪へざるこころなり。

然れども顧りて考ふるに、卿等既に斯道最高の學德を獲得蓄積せられたりと雖も、理想の彼岸に達すべく猶ほ或は遼遠の感なき能はず。且つ今や帝國は昨秋大震災の瘡痍未だ癒へず、更に社會各方面に解決を要すべき幾多大問題の存するありて卿等の活動に俟つもの多く、その前途は益多事多望なりと謂はざるを得ず。さらぬだに學海は渺茫にして世路更に崎嶇たるものあり。卿等或は進んで益學理の蘊奧を究め、或は出でて愈實務の煩累と戰はんも、冀くば苦に堪へ難を排し以て大成を期し、本大學の名譽を發揚すると共に生等後輩にその良範を垂示せられんことを。

噫本日を以て袂別の機に會す。生等惜別の情禁ずる能はずと雖も意氣を鼓舞し、以て雄雄しき卿等の門出を送らんとす。乞ふ卿等自愛自重健鬪せられんことを。聊か蕪辭を述べ謹んで送別の辭とす。

關西大學專門部在學生總代

卒業生總代答辭

本日生等のために卒業證書授與の盛典を擧行せられ、多數朝野の貴紳先輩の賁臨を辱うし、今又これ等來賓各位竝に學長より懇篤なる訓諭を賜ふ。これ生等の深く光榮とするこころなり。

顧るに生等本學に入りてより數星霜、或は熱誠なる諸先生の御薫陶により、或は痛切なる校友諸氏の御指導により、或は光輝ある學風の感化により、淺學菲才の生等がここに本日の榮譽を得他日飛躍の礎を築く。生等の感謝措く能はざるこころなり。

惟ふに今や邦家の內外漸く多事ならんとす殊に數萬の生靈と國富の大半とを失ひたる災害の後を承けて、時方に復興の第一年なり。青年活動の天地決して狹しと謂ふべからず。この秋に當り生等本學を出でて活社會に入り、大正の維新を雙肩に擔はんとす。ただ生等の菲才果して能くこの任務を完うするを得べきかを憂ふと雖も、本學教養の精神を體し、常に心を德操の涵養に潛め、出でては社會の先達となり、入りては研鑽自修以て大成を期し、本學の鴻恩に報ゆると共に私學の權威を發揚し、以て本日の光榮を空うせざらんことを期す。聊か蕪事を述べ謹んで答辭とす。

關西大學第三十六回卒業生總代

專門部入學試驗施行

三月二十七日から同月二十九日までの三日間に亙り本學專門部本科竝に同豫科の本年度入學試驗を本學福島學舍に於て施行した。

岩崎教授の歸朝

昨年九月以來諸大學視察のため渡歐中であつた本學教授岩崎卯一氏は、本誌前號豫報の三月三十日より一日早く同月二十九日朝神戸入港香取丸で無事歸朝した。

帝國經濟會議と本學關係者

今回本學關係者中左記諸氏は帝國經濟會議議員に任命せられた。

顧問　桑田熊藏　評議員　下村宏
評議員　喜多又藏　評議員　堀啓次郎
評議員　關一　總理事　山岡順太郎
理事　佐竹三吾

尙ほ右の中、山岡順太郎氏は同會議交通部副部長に任命せられた。

首藤賛助員の學位受領

本學賛助員首藤守彥氏は兼ねて大阪醫科大學に學位請求論文提出中であつたが、今回審査の結果醫學博士の學位を授與せられた。

武內・辰巳兩氏の轉居

今回左記の通り轉居した

講師　武內省三
大阪府豐能郡豐津村字垂水九五四ノ七

講師　辰巳經世
大阪府三島郡吹田町一二二ノ六

新設本學商業部經濟學科學科課程その他に就て

去る三月十一日附を以て大學令に依る本學商學部に經濟學科を增設することに就き文部大臣の認可を得たことは前號所報の通りであるが、いよいよ本月各科の新學年開始と共に開講することとなつた。その學科課程等は左の通りである。

學科課程

第一學年	授業時數	第二學年	授業時數	第三學年	授業時數
必修科目					
經濟原論	四	金融論	三	交通政策	二
統計學	二	財政學	四	社會政策	二
憲法	三	民法債權	六	行政法	二
民法總則物權	六	經濟政策（商業・農業・工業）	四	民法親族相續	四
社會學	二	商法總則會社商行爲	六	保險政策	二
經濟史	二	特種經濟問題	二	商法手形海商	五
英語經濟	二			經濟學史	二
				セミナリー	二
				英語經濟	二
選擇科目					
經濟地理	二	政治史	二	國際私法	二
簿記原理	二	外國爲替	二	殖民政策	二
刑法總論	二	刑法各論	二	外交史	二
保險學	二	取引所論	二	政治學史	二
政治學	三	國際公法	四		
哲學	二				
合計	二五乃至二九		二七乃至二九		二五乃至二七
隨意科目					
英佛獨語ノ內一	二	同上	二	同上	二

◎選擇科目—第一學年ハ二科目若クハ三科目、第二學年ハ一科目、第三學年ハ一科目若クハ二科目ヲ學年ノ始ニ於テ選定シ學長ノ承認ヲ經ヘシ

尚ほ右經濟學科增設につき本學學則の一部を左の通り變更した。

第六條　學部ハ法學部及商學部トシ法學部ハ法律學科及政治學科ニ分チ商學部ハ商業學科及經濟學科ニ分ツ

第二十九條　學部ノ卒業者ハ左ノ區別ニ從ヒ學士ノ稱號ヲ用フルコトヲ得

一　法學部卒業者ハ法學士

二　商學部商業學科卒業者ハ商學士

三　商學部經濟學科卒業者ハ經濟學士

佐竹理事文政審議會委員被仰付

本學理事、法制局長官佐竹三吾博士は、今回文政審議會委員を仰付けられた。

織田顧問送別會並に京都講師招待會

過般歸朝、更に再び近く渡歐の途につかれる本學顧問、國際司法裁所判事織田萬博士送別のため及び平常本學のため態京都から出講を煩はしてゐる講師諸氏の勞に謝するため、本月五日、京都市都ホテルに於て織田顧問送別會並に京都講師招待會を開催した。當日の出席者は左の通りである。

織田　萬氏　山田　正三氏
末廣　重雄氏　宮本　英雄氏
黑田　覺氏　竹田　省氏
鳥賀陽然良氏　宮本　英脩氏
森口　繁治氏　財部　靜治氏
千賀鶴太郎氏　菅原　眷二氏
小川福太郎氏　中西　仁三氏
渡邊宗太郎氏

尚ほ本學當局者としては、山岡總理事、宮島專務理事、白川理事、垂水理事、木下幹事の五氏が出席した。

本學法學部卒業者の高等學校教員無試驗檢定認定

大學令に依る本學法學部法律學科卒業者及び同政治學科卒業者であつて、民法(親族法、相續法)及び刑法を選擇履修した者に對し、本月九日附を以て、文部大臣から法制及び經濟の高等學校高等科教員無試驗に關する指定があつた。因に同商學部商業學科並に經濟學科卒業者に對しても近く同樣の指定がある筈である。

大學豫科入學試驗施行

本月七日から同十二日まで、本學年度本學大學豫科入學試驗を施行した。

神宅留學生の轉居

本學留學生として滯歐中の神宅賀壽惠氏は今回轉居したが、新アドレスは左の通りである。

Monsieur K. Kanyake
chez Monsieur Schneewélé
17-1 rue Ch,—Grud,
Strasbourg, France.

本學社會科學研究會の英文經濟書編纂

今回本學社會科學研究會に於て左記英文經濟書を編纂して、學報局から出版するこゝになつた。同書は特に經濟學研究の入門者に恰好の書物である。學生諸君に推奬して已まぬ。

Modern Economic Problems
—定價金壹圓八拾錢

(第八頁より續く)

存在より論理的「アプリオリ」に轉向せしめたのである。斯くして彼は自然科學救濟なる大業を成就し、他方哲學に「批判主義」なる新局面を開いた。此綜合は果して彼が直接の目的なりしや否やは筆者には不明とするも彼の哲學が其形式に於て二大潮流を巧に綜合してゐる事實を看過す事は出來ない。カント哲學の綜合はプラトーがプラトー以前の諸哲學の一切を綜合して建設した一大組織にも比す可き偉觀である。「素材なき形式は空虛であり、形式なき素材は盲目である」とはカント哲學の綜合的方面を鮮明に表現した標語である。

(筆者附記)

以上極めて大略ながら、カント哲學の根本的特質と、時代との交涉の經緯を示した積である。此廣大なる領域に亘る研究に於て筆者の不敏と未完全とはさる事ながら、轉居早早の際なれば書籍は不整理に、雜事亦多端にして精緻なる論究と、充分なる引證は勿論、敍述の推敲にすら充分の時間を割き得なかつた事は遺憾に堪へぬ。讀者之を諒とせば幸である。

カントの著作及び論文

1. Gedanken von der wahre Schätzung der lebensigen Kräfte.
2. Allegemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels 1755
3. Versuch über den Optimismus 1759
4. Falsche Spitzfindigkeit der vier syllogistischen Figuren 1762
5. Versuch, den Begriff der negativen Gröszen in die Weltweisheit einzuführen 1763
6. Der einzig möglichе Beweisgrund für das Dasein Gottes 1764
7. Räsonnement über den Abenteuerer Komarinicki 1764
8. Varsuch über die Krankheiten des Kopfes 1764
9. Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Thorie und Moral 1764
10. Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen 1764
11. Die Träume eines Geistersehers erläutert durch Träume der Metaphysik 1666
12. Kritik der reinen Vernunft 1781
13. Prolegomena zu einer jeden Künftigen Metaphysik 1783
14. Beantwortung der Frage, was ist Aufklärung 1784
15. Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht 1784
16. Grundlegung zur Metaphysik der Sitten 1785
17. Metaphysischen Anfangsgründe der Naturwissenschaft 1786
18. Mutmaszliche Anfang der Weltgeschichte 1786
19. Kritik der Praktischen Vernunft 1788
20. Kritik der Urteilskraft 1790
21. Reigion innerhalb der Grenzen der bloszen Vernunft 1793
22. Ende aller Dinge 1794
23. Philosophische Entwurf zum ewigen Frieden 1795
24. Metaphysischen Anfangsgrunde der Rechts und diejenigen der Tugendlehre 1797
25. Metaphysik der Sitten 1797
26. Streit der Fakultäten 1796

(完)

校友の

船場警察署長　石塚大藏氏
（明治三十九年法律學科出身）

水の都――煙の都――實に大阪の商工業は東洋の經濟が倚存する中心である。而もこの一大商工業を運轉活動せしむる中樞所謂ビジネスセンターは、我が石塚大藏氏がその警察の責に任じてゐる船場一圓であることは人のよく知るところ、この意味に於いて大阪市民が安んじてよくその東洋に冠絶せる生産力を發揮し得る所以のものは、氏の努力に俟つこと蓋し少くないと云ひ得る。

氏は明治十二年鹿兒島に呱呱の聲を擧げた。人を射る眼光と磊落な高笑ひに先づ聽者の心膽を寒からしむるところ、そのかみ短跨弊衣、大道を濶歩した薩摩隼人の面影を傳ふるには充分であるが、一世の英雄に殉じて臥薪嘗膽したその昔語りは併し聞く由もなかつた。明治三十六年に警部となり爾後次第に昇進して各署の署長を歴任し、以て今日に及んだその半生の思出は可成り血と涙とに彩られたものであつたらう。氏が警察官としての細心の注意と部下統御の才能とはかうした間に養はれたものと思はれる頭盧漸く光を增すものはあるが、尚その眉宇に漲る精悍の氣は今後の大成を物語つて餘りある。

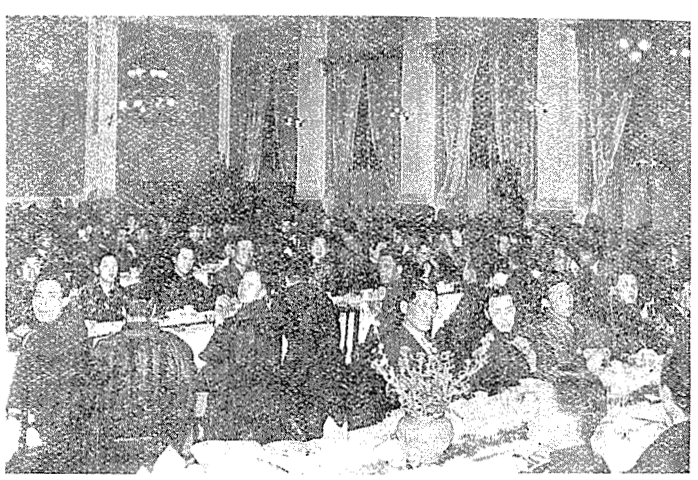
『元來警察は仕事そのものが消極的な目的を持つてゐるもので、或ひは安寧秩序の維持だとか、人民の保護とか、ともすると所謂事勿れ主義、保守的な傾向に陷り易い。この弊を矯める爲めには今後どうしても『增福警察』と云ふ意味合ひで仕事をして行かねばならぬと思ふ。勿論人民の福祉を增進するのは內務部の仕事であつて、從來の警察の定義としては增福警察などはないのであるが、矢張り凡ての施設が時勢の進歩に順應して行かねばならぬやうに、警察の仕事も世の大勢に背くわけには行かぬ。經濟學でも近頃はよく厚生の經濟學とか云ふぢやないか。但しこれが實際上の問題となると一朝一夕では解決出來ぬ事も多からうが少くとも氣持はさうでなければこれからの警察事務は、全然砂を嚙む如き無味乾燥なものとなつてしまふであらうと思ふ。』又談偶選擧の問題に及ぶと

『何、選擧干涉なんてとても出來るものぢやないよ。世間からはいろいろに云はれることもあるが、犯罪のあつた時にこれをあげるのは警察官の務めだからな。選擧に公正を期すると云つたつて「私心を去り」さへすれば、問題はない。角力だつてひいきがなければぢつちが負けたつて勝つたて何でもないやうなものだよ。なに、學生が政治運動に關係することが、まアせない方が穩當だね、學生と云へば未だ修業中の身だからな。』と。

校友彙報

校友會春季大會開催

去月二十日本學專門部第三十六回卒業式終了後、午後五時から新卒業校友歡迎會を兼ねて本學校友會本年度春季大會が、市內中之島大阪ホテルに於て開催せられた。定刻右新校友を加へて會員約五百名出席、初め講談、琵琶歌、奇術等の餘興があつて後宴に入り、午後七時半一同本學の萬歲を三唱して、非常な盛會裡に散會した。



尙ほ當會に於て同會會則の一部變更並に同會前年度常議員の任期滿了につき、山岡會長の指名に依り本年度常議員を決定すべきこと等を決議し、新常議員は結局左の通り決定した。

明四〇法　西川　武　明四四商　田中俊逸
大一〇法　田中英一　講師　並山興道
明三七法　內藤正剛　推　中務平吉
明四四商　安川彥夫　明三〇法　松山藤雄
明三九法　松本靜史　明四三法　里村安二郎

校友住所移動

門山廣尙（大九法）東京市京橋區日吉町國民新聞社內
松山藤雄（明三〇法）三島郡千里村字佐井寺一四三七
川田廣一（明四二商）南區天王寺南河堀町三九四
矢野國臣（大一一商）大軌沿線小阪停留所前
佐藤禮三（大一〇商）東京市麴町區永樂町一丁目郵船ビルディング內日本生命保險會社東京支店
江見興平（大八法）神戸市兵庫縣廳保安課
石合操（大一一法）姬路市東鄕町天神社前
池田重吉（明二三法）事務所＝福岡市大名町八住宅＝大分縣別府田ノ湯衞菊園
廉田友三郎（大一一法）北區北野大深町鐵道官舍西
佐々木音滿（大一一法）東京府北豐島郡西巢鴨町池袋西山五一五西尾方
人見福松（大一一商）東京市日本橋區小傳馬町二ノ九
小泉要三（大一〇法）市外龜橋町丘一六
塚原國治（明二九法）東京府豐多摩郡澁谷町大字青山南町七丁目二ノ五
田村芳太郎（明三六法）大連市越後町四大興號
藤田少介（大六法）大連市外聖德町ヲ區四八
瀧本貫（大七法）南區安堂寺橋通三丁目一五
吉田金吾（大九法）東京府西巢鴨町宮仲一九六五
森塚主城（大三八法）東京府南多摩郡日野町豐田

面影

大同電力株式會社大阪支店長

木村森藏氏

（明治四十一年法律學科出身）

『大學は勿論眞理討究の場所であつて、學校當局がこれに力を盡すのは誠に結構なことであるが、さればとて大學に學ぶ凡ての學生が皆學者になるのではなく、その大部分が實際の仕事をして行くものである以上、學校當局が卒業生の就職について相當の努力を拂ふことも亦必要なことであると思ふ。又大學としてもその發展はその學校を母校とする卒業生の活動・成功に俟つこと多いのであるから、折角の卒業生を路頭に迷はすと云ふやうなことでは決して大學そのものを大にする所以でない。從つて大學當局も平日より外は實業界と連絡をとり、著名な銀行會社に大學をよく了解せしめ、卒業期には多數の申込を受けるやうにし、内には時勢に應じて學校の設備なり内容なりを充實せしめ、學生をして他日に備ふる教養を得るに不便なからしめねばならぬ。一方卒業生も努めて後進を導くやうにし、自己の運命を開拓すると同時に、後進の天才をして徒らに不遇を嘆ずるやうなことなからしめることに努力するが肝要である。有爲の才を抱きつつ途を得ない爲めに、折角の一生を埋れて暮す人の多きを思ふとき特にこの感なきを得ない。更にこれが爲めには、以上學校當局及び校友の努力の外に學生諸君自身にも發奮して貰はねばならない。例へて云ふと先輩が大いに後進を登用しやうとしても、他校の卒業生に技倆が劣つてゐると云ふやうなことでは如何とも致し方がない。たとへそれ以上でなくとも、少くとも同等の才能なり資格なりを備へてゐなければこれに昇進の途を開くことが出來ないではないか。此の意味に於いて學生諸君も大いに自重勉勵していただき度い。そしてこの學校、校友、學生三者の努力が相俟つて始めて大學の隆昌も期し得られやう。かくて從來の如く關西の實業家が關東に人材を求めることもなく、西日本に於ける實業界の中堅は、母校出身者によつて左右し得ると云ふ日も來るであらう。尚序に學生諸君に御注意申上げ度いことは、今後はごしごし人材が輩出するであらうから、立身に從來よりも長き期間を要すると云ふことと、從つて、今後社會に於いて最後の勝利を得る爲めには、身體の强壯なること、熱心なること、機敏なることの三つの條件が必要であると云ふことである。』

氏は三重縣の人、本學卒業後二十八歳にして市外平野郷警察署長に任ぜられ、爾後玉造署長、府刑事課長、高等課長、曾根崎署長、監察官等を歴任して、大正八年に官を止めて京阪電鐵に入り、翌年大阪送電、日本水力、木曾電氣興業の三社合同して、現今の大同電力株式會社が創設せらるるや、その理事として大阪支店長に任ぜられ、今は資本金壹億參千萬圓を擁する日本最大の電力會社をバックとして關西の實業界にその巨腕を振ひつつある。氏の將來や蓋し刮目に價するものがあらう。

校友改姓名

大六商　平野光義（舊）　三瀨光義（新）

本年度卒業新校友住所錄

大學部法律學科

林　和四郎　市外鷺洲町浦江二八七平方
長井鹿義　北區眞砂町二四富永竹夫方
小泉重信　豐能郡豐中村新屋敷
溝手二二　神戸市中道通九丁目三〇文屋光治郎方

大學部經濟學科

亥野貞吉　兵庫縣西灘村上野字前田四四五六
八田　薫　福井縣鯖江町上深江
谷岡　格　兵庫縣武庫郡住吉吳田

大學部商業學科

畑　孝二郎　東成郡天王寺村阿部野二一〇實兄畑孝一郎方
西宮辨眞　東成郡天王寺村阿部野三三五姫井方
坪郷芳介　西成郡神津町木川四〇一ノ四
氏田藤平　兵庫縣武庫郡寶塚
松原與七郎　市外吹田町松ヶ鼻
小林一雄　東區横堀三丁目一六
江口　透　福岡縣山門郡沖端村矢留町
森田仁一　市外北天下茶屋聖天山下德田誠一郎方
森川太郎　兵庫縣尼崎市西屋敷一番町

專門法部律學科

伊藤正雄　南區日本橋筋四丁目二七
石山三治　北區上福島中三丁目三三浦田傳治方
松浦一夫（大二三法）　北區堂島北町二〇藤田組方
松本　茂（大二一商）　堺市寺池町西二丁二里見方
寺内信秀（大三商）　鹿兒島市生産町大阪商船會社支店内
谷武治（大二二商）　市外鷺洲町大仁一一八

大學部法律學科

稲井義夫　南區瓦屋町一番丁二七番地
岩瀨竹太郎　兵庫縣武庫郡御影町石屋字辰巳
伊賀利夫　尼ヶ崎市西屋敷五番町七〇九内海方
伊藤茂太郎　市外鷺洲町海老江一〇八六ノ二岡田方
六藤藤太郎　市外鷺洲町南浦江五六八ノ一
初瀨靜雄　西成郡神島町本通北二丁目二五〇地
林　利作　市外鷺洲第四尋常小學校
長谷川安治　東區御蓋町三六
原田孫吉　北區北梅田町四五一鬼勢勝方
林　敏夫　市外鷺洲町浦江七〇八
畑浦濟美　東成郡天王寺村大字天王寺二二四七
羽田野久夫　南區天王寺生玉前町五二二三
花立　勸　東成郡中本町中道字折立松村キク方
西山正雄　南河内郡狹山村西池尻三二
西川武夫　神戸市榮町一丁目四六番屋敷
西村繁雄　福井縣丹生郡天津村御油
西川七三　兵庫縣佐用郡大廣村末廣
本田捨松　中河内郡龍華村大字龜井第一二八番
星田九一　北區西野田對込町七二六地
土井吉光　西區四貫島町二五九
德野捨三　北河内郡諸堤村德庵
岡野廉平　市外天王寺村旭通二ノ九一四渡邊方
岡本勝治　西成郡中津町下三番一二番地
小川言吾　東區高麗橋三丁目一地日本電力會社
岡本亮一　東成郡平野郷町本町五丁目
大木田關哉　西區三條通二丁目二二番地
緒方清　豐能郡南豐島村字原田永田利三郎方
若山資雄　府下堺市車ノ町東三丁一番地戎谷タキ方
和田一佐　北區堂島濱通一ノ八五備前仙五郎方
柏迫春三　西成郡豐崎町本庄六四一
加藤謙次　兵庫縣明石郡玉津村吉田五五番地
金星武三　奈良縣山邊郡二階堂村大字田井庄五
神谷虎男　神戸市御幸通八丁目一〇番屋敷
神澤周軌　北區福島北二丁目一一九渡邊英一方

川西榮次郎　神戸市大谷町一丁目三〇番
川瀬正憲　北區野崎町九四八番地
加藤正治
柏原能心　尼崎市竹屋新田一一五番地
香川一男　明石市右手塚町二一六
加地良七　北區安治川上通一丁目一七八番屋敷
鍬田政熊　府下堺市宿院町東三丁目二二番地中島ステ方
蒲原喜一　兵庫縣武庫郡鳴尾村字中津五八〇
香月實　西區土佐堀通一ノ八
片岡晴磨　東成郡西天下茶屋櫻通七丁目一三三一德廣方
刈谷明忠　東成郡住吉村七八一
吉田鹿之助　北區上福島北二丁目一一七番地
吉川義治　兵庫縣明石郡垂水村西垂水一〇四四
横山四郎　北區北野東之町六二一安田ヤス方
吉村富太郎　府下鶴橋町東小橋一一一藤村方
武内保夫　神戸鐵道局大阪電力區
田中庄次　北區上福島北一丁目八七地高崎館
田中清太　北區堂島中一丁目一二番地政靖方
田中仲吾郎　神戸市神戸高等商業學校構内
谷岡登　兵庫縣住吉吳田郵便局
田邊芳市　東區高麗橋五ノ九板垣方
建内保　兵庫縣武庫郡西宮町字常磐一二番地
曾我部軍治　東成郡中本町中道二二三番中川方
妻木信一　北區上福島北三丁目一九〇ノ一長谷卯三松方
都野守良雄　堺市林木町東三丁一
角谷五郎　北區上福島北一丁八七松重義明方
名越日月　北區堂島中一丁目二九遠部逸太郎方
永吉喜定　鹿兒島縣大島郡和泊村字畦布六ノ一
中井吉輝　府下豐能郡箕面村牧落
長島重五郎　北區扇町市共同宿舍三九號室
棗耕三郎　北區西野田今開町二丁目五一九ノ八
田村清一方
中島一郎　北區上福島二丁目七五七番地

長手米吉　北區西野田新家町二丁目五七番地
仲渡七兵衛　南區馬淵町三一四番地
南光義治　南河内郡高向村大字日野
中西司郎　西成郡傳法町南三丁目
宗内正　北區西野田玉川町一丁目圓滿寺前
松松鐵次　北區上福島北三丁目一九〇田中方
植田二郎　南區空堀町三六番地
野村楠男　兵庫縣武庫郡御影町石屋旭詰二七一
野田健太郎　西區市岡町三四六ノ一堺儀八郎方
野田增穗　北區澤上江町四丁目三三ノ四覆口方
日下芳太郎　北區東梅ヶ枝町五四八
草野忠男　西成郡神津町堀一三六井上廣太方
桑原正男　北河内郡水本村大字瘧屋
楠山秀太郎　南區天王寺生玉前町四二六番
黒才實　西區湊屋町遞信省電氣試驗所大阪出張所
隈部勝　西區島屋町四〇六番地
由邊直儀　福岡縣三井郡草野町大字草野
矢野秀雄　北區東野田町五丁目一九九番地
山本京介　市外東天下茶屋御坊屋敷三九三山本方
山口行太郎　西區櫻島町二
山本文助　兵庫縣武庫郡住吉村一二二六ノ三
山上義夫　堺市市之町東五丁
松岡爲吉　兵庫縣武庫郡御影町字上弓場六七三ノ一
松廣茂一　西區五條通二丁目二九
増田義市　北區上福島北二丁目一〇九下田方
松山多三郎　大阪府廳特別高等課
松井理一郎　東成郡榎本村大字放出
牧瀬健吉　西成郡鷺洲町南蒲江五
松田正義　高知縣高知市本町三丁目一五七
藤井正雄　北區中野町一丁目一四九
深井湛　西區四貫島町二六一、三好小太郎方
古塚勘助　西成郡千船町大字佃一五五
福田松彦　東成郡榎並町關目一三番地
淵上又　西成郡鷺洲町海老江一一三二德山方

福岡多賀義　東成郡天王寺村字天王寺五二六番地
福田元　南區順慶町二、三六地河西方
小松勝馬　北區西堀川町五九地山路卯之助方
小塩濱治郎　兵庫縣神戸市御崎村二四六
小橋正男　豐能郡池田町小坂前町
江口忠夫　北區宗是町二八番地森内方
淺川靜一　北區上福島北二丁目一〇九稻田方
穴吹好雄　北區東野田町一丁目四四二番地
朝山峻勳　府下天下茶屋本通四丁目村松方
在里三芳　東成郡古市村森小路一一三番地
赤松佐一郎　兵庫縣明石市大明石村一一八九ノ一
淺野樹雄　岡山縣淺口郡里庄村大字新庄
笹岡傳平　北區本庄黒崎町堀川文化寮内
笹埜寛　神戸市水笠通り五丁目九九番屋敷
齋藤富佐夫　兵庫縣武庫郡御影町申御田道添進方
佐瀨憲治　北區北野大深町九一
坂口軍司　市外東天下茶屋二一四九
木村敏太　北區東野田町一丁目四四二番地
北後義一　西成郡北中島村字蒲田二九番屋敷
木本重雄　市外鶴橋町字木野二五五
岸芳一　北區貞砂町三五熊田方
岸田富藏　堺市新在家町西二丁一八番
菊農正太郎　東區東平野町五丁目一六六
岸本岩次　神戸鐵道局庶務課
木村松治　西成郡豐崎町南濱一五番地
金鐘崑　忠清南道全州郡灘川面見東里
三橋芳實　東區南久太郎町三丁目四三大島方
道行敏郎　神戸市東須磨大手一二ノ三八
三谷龜太郎　神戸市外葺合御幸通四丁目四七ノ二
宮本勇男
白井源三　西成郡豐崎町本庄六六六高木多馬方
下山喜久末　西區市岡辰巳町字砂橋詰梨大藏方
志賀潤八　北區北梅田町四四五川瀨新吉方
下村吉丸　神戸市湊山町二八番地
久田一榮　市外今宮町西天下茶屋柳通七丁目九

廣實郁雄　北區上福島北一丁目一四四木戸方
土方一男　西區天保町三九山本伊勢松方
森下喜藤　府下木津川水上警察分署内
森本尙　府下三島郡吹田町
畝川正夫　北區上福島中四丁目二一二番地中田總一郎方
關清成　兵庫縣明石市大明石村三九七番地杉山健吉方
關國男　東成郡天王寺村三〇七三番地
杉本幾太郎　東成郡中本町中道一二七
杉本米善　北區北野大深町鐵道省官舍二八ノ六

専門部經濟學科

井上孟　西成郡鷺洲町北蒲江七〇八
井阪恭一　東區東平野町二丁目四三番地
井上巧　豐能郡南豐島村大字穗積九〇七番地
伊木貞市　神戸市兵庫仲道通三丁目九九地
岩崎清　西區土佐堀裏町二〇番地
西村達司　京都市上京區竹屋町通松屋町東入ル藁屋町五三五番地
西田重太郎　北區東梅ヶ枝町六〇五番地
新田武夫　南區上本町三丁目二八番地
細田茂雄　北區中之島五丁目四八松浦龜吉方
床分松藏　兵庫縣武庫郡精道村芦屋一二四
富山忠三　神戸市多聞通二丁目三番地尾崎氏方
德田琢磨　兵庫縣武庫郡住吉村吳田安達勇吉方
富田貞督　神戸市下山手通九丁目四四白水方
小野藤平　北區澤上江町三〇四番地
岡崎英夫　南區八幡町九番地
片岡博　神戸市中道通七丁目一二ノ二八宇田良一方
上村行一　北區西野田吉野町一丁目三七〇地
金田定吉　北區金屋町一丁目二七番地
吉田正義　西區三軒家上ノ町三二二
玉置衛　神戸市多聞通八丁目五番地
谷位一夫　神戸市籠池通二丁目一三番屋敷
園田豐　南區北桃谷五二

壺内敏夫　東成郡住吉村七八一
中村簡吉　神戸市榮町二丁目三九
成田剛雄　西成郡鷺洲町南浦江四五三持田方
中西政之助　兵庫縣武庫郡本山村中野高橋竹松方
上野元明　東區南農人町二丁目一七土屋方
桑田龜之助　西成郡玉出町六五〇
山本喜祐　神戸市長樂町二丁目八番地
增田定治　滋賀縣大津市島ヶ關七
圓尾寅雄　北區上福島北三丁目一九〇鍋島方
松本晃　西成郡豐崎町南濱十五番地
松浦弘　西區八幡屋町一四三ノ二脇鹿五郎方
增子一巳　南區天王寺細工谷町五四九〇
二川敏之　西成郡稗島町一八八七竹本方
藤田信雄　兵庫縣多紀郡八上村小島房藏方
福島秀正　北區今井町二一番地
近藤政士　兵庫縣武庫郡西宮町前松原一七八ノ一乾寅太郎方
小西直竟　兵庫縣武庫郡西宮產所二〇四〇ノ一
江尾兼榮　西區川口町電停前農商務省中央度量衡檢定所大阪支所
阿部正一　北區曾根崎町大阪遞信局經理課
荒井品三　北區龍田町八九
朝原正　兵庫縣御影町郡家字千本田一二五番地ノ四
佐津間秋夫　北河內郡九ヶ莊村字下神田
酒井鶴之助　北區河內町二丁目一九
櫻井喜三次　南河內郡黑山村大字北餘部四一七
木村隆　北河內郡嬉屋川村大字木田第一〇一
絹田英一　北區中野町七五番地
岸田正雄　神戸市元町七丁目二三番
庄司佐兵衛　東成郡安立町大字安立一〇三番地
守谷次郎　兵庫縣武庫郡住吉村字丸ノ後陸野方
望月靖彥　南區逢阪下ノ町四九六二北川方
諏訪賢三郎　西區西九條上ノ町一七三遠上方
專門部商業學科

井上定次　西成郡今宮町西四條二丁目五五二番蒲生方
泉正次郎　北區下福島二丁目三三〇地
乾英一　北區天神橋筋七丁目三四〇
岩田卓止　西區靱南通三丁目二三地西村方
飯田種次　北區西野田吉野町一丁目五五國光製藥株式會社寄寓
岩崎懷也　豐能郡岡町寶通二丁目濱池舍宅內
池田要二郎　神戸市籠池通四丁目三番地藤代方
羽根嘉秀　東成郡天王寺村六一一六
原田誠晃　京都府紀伊郡堀內村筒井伊賀一六ノ一
服部正作　南區饅谷東之町住友寧靜寮
八村守雄　西區田中町夕凪通四七番地
蜷木茂驥　神戸市旗塚通四丁目七ノ五西村氏方
西田正義　北區信保町一丁目一二七西田方
新田巖　西區立賣堀北通一丁目奧田防水布株式會社內
堀茂一郎　兵庫縣武庫郡本庄村東三三〇地
堀四郎　西成郡中津町下三番七四地
頓戸勇　神戸市平野馬場町七八
岡村順藏　北區老松町二丁目一二番地
岡本卯作　東成郡榎並町關目七九番屋敷
沖原力　北區上福島北一丁目六八地吹田方
奧村宗三郎　南區廣田町一〇一八番屋敷
大久保鎚造　神戸市元町通五丁目一八三番屋敷
脇博　西區北境川町松本兵吉方
神田明次　西區西野上之町七番地
柿澤貞光　北區上福島北三丁目一九〇ノ一新番號一三一番地
河南義雄　北區堂島北町一番地
加治信一　南區生野國分町四七九番片岡氏方
吉見直枝　南區眞法院町五四一一地
米田信太郎　北區中之島二丁目一〇日本綿花株式會社內
田野德右衛門　北區本庄

田中浩道　東成郡鯰江町今福三〇七
瀧井嘉藏　南區大國町三丁目一六二八瀧井方
瀧口守義　南區天王寺勝山通一丁目四四三三番佐々木方
田淵昌平　北區上福島二丁目七一〇番地
田中八藏　西區梅本町五番地永原安次郎方
壺田倫夫　東區東平野町三丁目平野第二小學校
堤正義　北區朝日町三五番地
中村利雄　北區富田町三〇番地
中村卯之助　北區上福島北三丁目五〇
永井鐵士　北區曾根崎上一丁目一八番地
長尾好雄　西區西長堀北通五丁目六番地
中川吾一　東成郡城東村字鳴野五六九
中野敬三　北區上福島北四丁目新名義舊中四丁目播磨館內
中山幸市　東區中道黑門町一九一ノ一
永田傳市　東區神崎町三四西岡方
中谷政男　南區難波西神田町八八二番地
向井重太郎　南區竹屋町四番地
室田清二　西區南堀江下通四丁目二八東條方
浮田時太郎　南區瓦屋町一番町二二
梅川喜代造　西區西道頓堀通六丁目柏井藥店
上田安久　市外傳法町南三丁目
倉本永太郎　北區北森町一六番地
葛目成忠　北區中野町一丁目甲一八八號
國友重義　堺市新在家町東一丁二六番地ノ一
山口榮治郎　西成郡鷺洲町南浦江五六三地眞鍋方
安居秀雄　西區鶴町二丁目北川邸
山本定一　西區九條通三丁目五三四番地
八尋次助　東區內久寶寺町二ノ三六山本重子方
山中林三　堺市北半町西一丁二三
正下末夫　神戸市板宿角戶一ノ一小田乙吉方
松本徹　北區上福島南一丁目二四三
正木文雄　市外西天下茶屋橋通六丁目八三九
桝岡正太郎　市外大仁二三七

藤本壽哉　北區上福島北二丁目一一八ノ二西川旅館內
藤井了通　北河內郡三鄕村字高瀨一八番屋敷
藤本清一郎　東區上本町一ノ七
藤澤匡　兵庫入江通七丁目九九
合田桂二　北區上福島北四丁目五〇門田方
遠藤孝司　松江歩兵第六三聯隊第六中隊二班
芦田茂里男　東區北濱三丁目一九日畠正造方
青木茂　南河內郡平尾村大字平尾七
青木由郎　東成郡天王寺村字丸山一一三二番地
佐藤彌　北區西野田草開町七四ノ一山口方
齋藤喜市　豐能郡庄內村字瓜江
佐藤芳太郎　西區八幡屋町二六〇番地
佐竹圓洲　東區東高津北ノ町八八地西村方
坂下保　北區曾根崎上一丁目一五長谷川方
佐々木信敏　東區北濱五丁目住友銀行本店
京橋勇　東區上本町七丁目五三五九竹內方
岸本忠雄　北區中之島二丁目五四
木下源三郎　東成郡天王寺村大字天王寺五八五
北川勝藏　西區鶴町二丁目西福橋通
北元四郎　北區西野田龜甲町二丁目六二番地
簑田二郎　三島郡吹田町宮ノ前
三好友一　南區瓦屋町三番丁三七四
三井清市　東區常磐町一丁目一番地
南長之助　西區九條中通二丁目六二五ノ三
霜村盛鄕　北區中之島六丁目八番地株式會社岸本商店
篠原國隆　神戸市山本通一丁目三六屋敷相良方
清水一良　堺市北半町西一丁南海本線七道驛通
守山鼎吉　東京市芝區南佐久間町二丁目二番地青山菊次郎方
關本善和　南區高津十番丁一番地
須藤國雄　東區小橋寺町五八〇
杉之原正雄　西區市岡町三七三住友職工養成所
鈴木一郎　北區西野田吉野町二ノ四四八小松方

本學擴張基金寄附申込者芳名

（校友の部）　イロハ順

備考　一口金額五拾圓

一口　大二一法　古川龜雄氏
一口　同　藤谷政之助氏
一口　同　藤井正信氏
一口　同　藤田彌太郎氏
一口　同　福田惠氏
一口　同　藤原善平氏
一口　同商　福部知一氏
一口　同　古川武氏
一口　同　福井耕助氏
一口　同　深瀨義廣氏
一口　同　藤川等氏
一口　同　藤原誠太郎氏
一口　同　古澤文人氏
一口　同經　藤井鶴雄氏
一口　同　船越盛人氏
一口　同法　伏谷吉兵衛氏
一口　同一二法　福田一良氏
一口　同　藤波一治氏
一口　同　古川濱一氏
一口　同　藤原吉平氏
一口　同　福井清吉氏
一口　同商　藤田亦四郎氏
一口　同　福田三郎氏
一口　諸師　小久保定之助氏
三口　同　後閑宣太郎氏
二口　關甲卒　小西藤兵衛氏
一〇口　明二四法　小川龍丸氏
一口　同二六法　甲本信威氏

二口　同二九法　小宮次郎氏
二〇〇口　明三〇法　後藏武夫氏
二口　同　小林市松氏
二四口　同三二法　後藤德太郎氏
一口　同三三法　近藤政治氏
一口　同三七法　近藤常吉氏
一口　同三八法　小林正喜氏
一口　同三九法　兒玉善吉氏
一口　同四一法　小西健左衛門氏
一口　同四四法　權田皓氏
一口　同四五法　近藤博氏
一口　大二法　小林絹治氏
一口　同三商　後藤田德太郎氏
一口　同法　忽那文治郎氏
一口　同四商　近藤今藏氏
一口　同五商　小鹽平哉氏
四口　同七法　小山公氏
一口　同八法　小曳陽市氏
一口　推　小林良三郎氏
一五口　大九法　幸野蕃夫氏
一口　同　近藤友房氏
一口　同　小林宇三郎氏
一口　同商　小西政市氏
一口　同法　小山平治氏
一口　同一〇法　小山豐氏
一口　同　小松雅氏
一口　同　小泉要三氏
一口　同　幸崎一義氏
一口　同　小角太一郎氏
一口　同商　小西八治郎氏
一口　同　小林一二氏
一口　同　近藤淳一郎氏

一口　同法　古門庄三氏
一口　同一一商　合田熊平氏
一口　同　小西要一氏
一口　同一一法　小寺正久氏
一口　同　合田賢氏
一口　同二四法　小林茂樹氏
二〇口　同二五法　越川藤次郎氏
四口　同三八法　小比賀正信氏
二口　推　小崎司郎氏
二口　明四〇法　古藤光三氏
一口　同四二法　兒玉芳太郎氏
一口　大二法　小林直氏
二口　同三法　河野敏氏
二口　同四法　兒玉信次郎氏
五口　同商　小林農夫也氏
一口　同　近藤安次郎氏
一口　同五法　小西四郎氏
二口　同七法　腰高貞雄氏
一口　同九法　河面三一氏
一口　同商　小船正氏
一口　諸師　江崎定次郎氏
三口　同經　天地茂氏
一口　同一〇法　安藤謙一氏
一口　同　淺香新太郎氏
一口　同　阿部禮治氏
一口　同　荒木修一氏
一口　同　安藤勘一氏
一口　同　有井正輝氏
一口　同一〇商　秋山卓爾氏
一口　同　阿蘇章臣氏
一口　同　相松德三氏
一口　同選　阿能勝三氏
一口　同一一法　荒木正毅氏

一口　同　寺島熊市氏
一口　同一一商　寺岡秋男氏
一口　同一二商　寺田武一氏
一口　元講師　天宅敬吉氏
一口　明二四法　朝井矢一氏
一口　同二五法　赤松小一郎氏
一口　同三八法　淺沼猪助氏
一口　推　有田秀造氏
一口　明四〇法　赤堀政基氏
一口　同四二法　芦田高二氏
一口　大二法　淺田榮三郎氏
一口　同三法　青木平藏氏
一口　同四法　阿久津淺之助氏
一口　同商　芦傳一氏
一口　同　淺謙之助氏
一口　同五法　安藤伊重郎氏
一口　同七法　安達彌五郎氏
一口　同九法　明智宗弘氏
一口　同　荒木竹治郎氏
一口　同商　有吉不二男氏
一口　同經　天地茂氏
一口　同一〇法　安藤謙一氏
一口　同　淺香新太郎氏
一口　同　阿部禮治氏
一口　同　荒木修一氏
一口　同　安藤勘一氏
一口　同　有井正輝氏
一口　同一〇商　秋山卓爾氏
一口　同　阿蘇章臣氏
一口　同　相松德三氏
一口　同選　阿能勝三氏
一口　同一一法　荒木正毅氏

（以下次號）

關西甲種商業學校彙報

第九回卒業式擧行

別項學内報所載の通り、本校第九回卒業式は三月二十日午前十一時から關西大學專門部第三十六回卒業式を兼ねて、同學福島學舍に於て擧行せられたが、卒業生氏名竝に受賞者は左の通りである。

卒業生氏名

今道宗一、池田八郎、今西安雄、砂澤桂二、猪師孟、岩崎一郎、池内輝一、入江二郎、池下佐一郎、石野豐造、五十嵐忠雄、泉繁雄、岩井平八郎、原勝一、橋本滋、林岩雄、濱上八太郎、林蓮一、西山保一、西池秀夫、西野捷平、西川賢、西田巖、堀内吉夫、堀尾貞文、大槻實、小畑欽一、岡崎義雄、小澤太郎、大槻幸太郎、大原春治、大村強、岡田勇、綿重恒夫、門田政治、川喜田彰郎、金井榮一、桂美夫、河野吉治、龜井壽巳、金丸克夫、加藤義一郎、川島新太郎、河飯安治、吉門義恒、吉田義一、吉田松治、吉見勇三、淀井重三郎、吉田一二、竹谷玄威、武村光國、團野義一、瀧剛、田中守太郎、高橋胤雄、高橋勝郎、瀧脇健一、田村秀次郎、高木義秋、高田儀夫、竹内嘉二、高橋昇、津田義三、中村長二郎、中村武一郎、仲原喜世吉、中澤時夫、中務信貴知、中村榮三郎、中田喜一郎、中村寛治、鍋谷作造、長井政一、陸門素吉、梅谷忠行、内本勝之助、上村定宣、魚住金造、海野甚七、上村文吾、倉田健之助、黑田義明、山雄芳夫、八十興之助、矢野一馬、山口專二、山田秀太郎、安原榮治郎、籔興市、矢野清一、增田清作、增田宇一郎、松葉清治、松本謙次郎、增田武夫、藤本虎之助、古橋善三郎、福田鹿太郎、藤本榮治郎、小谷佐太郎、小坂清史、小林勇、兒玉淺次、小森和夫、兒玉德次、小寺寛治、秋田泰四郎、赤堀佐兵衛、阿部純雄、安東彦太郎、青木恒一、明石市松、坂根興市、猿山廣一、佐藤金也、木下尙武、木下友市、桐勝太郎、橘田喜藏、北山秀二、宮川省吾、三浦敏雄、宮岡四一、清水正三、島雄七郎、壽明重雄、柴橋彦一、柴田清、東爲三、平田健次郎、檜垣壽定、廣本福次、森田壽、森田義治、關原利喜藏、須上忠、杉竹清次郎、砂山武夫　以上合計百三十九名

受賞者

品行方正學術優等につき賞品授與

今道宗一、西山保一、大槻實、竹谷玄威、武村光國、小谷佐太郎、西池秀夫、門田政治

在學中皆勤につき賞品授與

原勝一、大槻實、岡崎義雄、大槻幸太郎、河飯安治、小寺寛治、木下尙武、三浦敏雄

在學中精勤につき賞品授與

今道宗一、西池秀夫、小澤太郎、金井榮一、仲原喜世吉

大阪商工中心會賞品授與

今道宗一、西山保一、大槻實

中川大阪府知事告辭

諸子夙に本校に學び多年勉學の功を積みてここに卒業の榮を荷ふ。これ實に諸子のために慶すべきのみならず又國家のために賀すべきなり。

惟ふに商業は國本を培養し社會人類の福祉を增進する所以のものにして徒らに私利を目的とすべきものにあらず。然るに現今動もすれば公衆の利害を顧みざるものあるは國家將來のため深く憂慮に堪へざるなり。今や諸子最新の學術を修め確乎たる理想を抱きて將に商業界に活躍せんとす。諸子の前途遠に多望なると共にその任實に重しと謂ふべし。諸子宜しく既修の學術技能を實際に施して實務に練達すると共に常に品性の修養を忘らず、以て着實穩健なる人格を玉成せざるべからず。これ諸子が大成を將來に期する所以にして亦國家の期待に副ふの道なり。諸子旃を勉めよ。

大阪府知事　中川　望

商工中心會賞贈呈の辭

本日ここに卒業式を擧行せらるるに際し一般卒業生諸氏に對し滿腔の祝意を表すると共に、特に此盛典に列し本校長より選奬せられたる優良學生諸氏に商工中心會賞を贈呈するの機會を與へられたるは不肖の最も欣幸とするところなり。商工中心會は創立日尙淺く施設亦特に見るべきものなきも常に商工業の進歩發達を念とし、商品に對しては『大阪商品なるが故に優良なり』を以て標語とし、事業に關しては『撓まぬ研究、渝らぬ努力』を信條とし聊か力を斯界の發展に致さんことを期せり。本會はかくの如く商工業の進展に努力すると共に將來斯界に立ちて活動せんとする青年諸氏に對して囑望するところ極めて切なるものあり。蓋し商工業の改良發達を圖るの方途多岐に屬すと雖も、その根本主力たる當務者の品性と手腕の如何に繫るところ大なるものあるを以てなり。諸氏が規定の課程を修了して卒業證書を受領せられたるは多年黽勉研鑽の結果にして固より一代の慶事たるを失はずと雖も、今後諸氏の向ふべき活社會の道程は決して坦坦砥の如きものにあらざるに想到するときは諸氏の大覺悟、大決心及び大努力を要すること寧ろ從來に倍するものあらん。

特に現下我邦の思想界は外來の影響を受けて著しく惡化の傾向を呈し、浮華放縱の流弊と輕佻詭激の陋習は滔滔として底止するところを知らず。かくの如くにして推移せんか、その前途洵に寒心に堪へざるものあり。この秋に當り諸子學窓を出でて實務に就き、或は高等の學府に進みて更に一段の修養を積まんとす。責任の重且つ大なる固より言を俟たず。希くは自愛自重して本會の期待に背かざらんことを。

商工中心會長　永田仁助

卒業生總代答辭

長閑けき恩寵の春の光に花も漸く綻びんとするの佳候、ここに本日を卜して卒業證書授與の式を擧げらる。生等の光榮何物かこれに加へん。

顧るに過去五ヶ年間に亘り生等日夕勉めたりと雖も、爲材幸に今日あるを得たる所以のものは、これ全く諸先生の誠熱なる御指導の賜にして生等の永久に忘るる能はざるところなり。然るに今や和氣靄靄たる學窓を辭し紛糾錯雜せる社會に一歩を踏み出さんとす。

熟ら世界の趨勢を考ふるに北米合衆國を除き、歐洲各國は汲汲として大戰の創痍を醫し、今やその全力を東洋市場に傾注せんとす。我帝國の商工業は實に困難なる地位に在りと謂ふべし。これに加ふるに内帝都復興の事業を以てし、外入超の逆勢を以てす。この秋に當り生等を體して益人格の修養と智能の向上とを怠らず、努力と奮鬪とを武器として勇往邁進し、我國實業界の發展に寄與し、以て本日の光榮に背かざらんことを期す。聊か蕪辭を述べて答辭とす。

卒業生總代　今道宗一

ロリア教授訪問記（一）

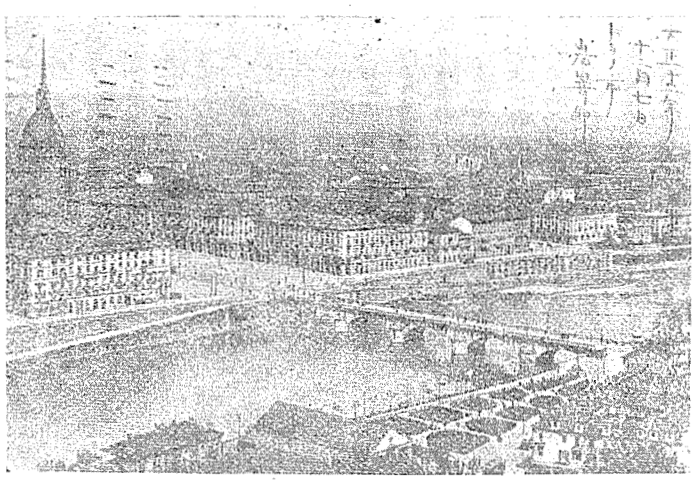
關西大學教授
ドクトル・オヴ・フィロソフィー
岩崎卯一

十二月六日午後二時當トリノ大學經濟學教授ロリア博士を、當市道路中最も美しきCorso Vittorio Emanueleに沿ふた私宅に訪問致候街路樹の葉は殆ど落ちつくしたれど、紺青の空から投げかけられる柔く暖かき南歐の陽光は秋のやうな感じをあたへ候。この道路に沿ふたる建物は皆立派にてニューヨーク市の富豪町たる五條通を想ひ起させ候。

九十六番邸と示したる家の門を潜り、玄關に入らんとせし時、折柄外出せんとせる背の高き瘠形の品のよき紳士に出逢ひ候。ロリア教授に逢ひたき旨佛語にて告げたるに、同氏は小生の佛語が英語式なるを觀破したるにや英語にて、余がロリアであると語られ候。小生が差出すトリノ大學學長の紹介狀を讀み、快く應接間に通され候。

應接間はイタリー中世紀の繪畫や彫刻等にて飾られ、富める學者の家らしき感じをあたへ候。同教授の年齢は既に六十を越したる可く、蒲柳の質のやうに見受け候。小生にイタリー卷煙草をすすめたる後、小生の質問に答へ左の如く、稍怪しき英語と、極めて正確なる佛語とを無意識に混和せしめて語られ候。

『イタリーに於ける最も卓越した社會科學者は誰であるかと言ふ御質問に對し、滿足な答を與へることは私には出來ない。しかし、若しも現代に於けるイタリー經濟學者として最も活躍せる人人は誰であらうかと言ふ質問に對しては二三人を擧げることが出來る。第一は言ふまでもなくナポリ大學（Università di Napoli）の經濟學正教授グラチアニ教授（Augusto Graziani）である。第二はミラノ商科大學（Università commerciale "Luigi Bocconi" in Milano）に於て經濟學原論を講じつつあるミラノ高等工業學校教授ゴビー氏（Ulisse Gobbi）である。第三はパヴィア大學（Università di Pavia）經濟學正教授スピノ氏（Camillo Supino）である。第四は經濟學者としてのパレト、即ち昨年長逝された瑞西ローザーヌ大學（L'Université de Lausanne）の經濟學教授パレト氏（Vilfredo Pareto）である。』



ロリア教授在住のイタリー・トリノ市

小生は經濟學には全くの門外漢にして、イタリーを代表する經濟學者としてロリア教授が擧げられたる四教授の中、第一のグラチアニ教授は、「經濟原論」の著者としてよりも寧ろイタリーに於ける社會學雜誌 "Rivista italiana di Sociologia" の編輯擔當者としての方が緣故が深く、第二のゴビー教授第三のスピノ教授の如きは、その名を聽くことさへも今が初めての位、第四のパレト教授は三年前パリ市にありし時、その大著「社會學」（Traité de la Sociologie generale）上下二卷一七〇〇頁に近き佛譯文を手に入れ、讀みこなさんと努力したることあるを以て、社會學者としては可なり馴染み深きも、ロリア教授がローマ大學に經濟學正教授パンタレオニ教授を擧げざりし點には稍不思議を感じ候。故に、イタリー經濟學を可成り特色つけた所謂數理經濟學に就ての教授の意見を質し候。

小生が數理經濟學派の消長に關し質問を發したる頃より、今まで老齢の禪僧の如く、平靜、柔和なりし、ロリア教授の顏面筋肉は或程度の緊張を現はし、教授の英語と佛語との混合度いよいよ激しく、聲調にも隱す可らざる熱を帶び來り候。

『數理經濟學も、心理學的經濟學も結構です。パンタレオニ教授とパレト教授との努力は何人と雖も尊敬せねばならぬ。併し忌憚なく言へば、今では全く行き詰つてゐる。それは當然なことである。元來數學は人類智能の最高發達の結晶として生れ來たもので、社會學の祖オーギュスト・コムトが言つたやうに、總ての科學の基礎とならねばならぬものです。數に關する觀念の助力なくして、科學の研究が不可能なことは言ふまでもないことです。數學は科學研究の寶であり武器である。從つてこれを使用する場合には充分な信念を持ち極度の注意を拂はねばならぬ。何となれば、數學の應用には嚴として侵す可らざる自然的制限があるからです。量によつて質を計り得ないことは原則である。ところが數學に興味を持ち、數を驅使することの巧みな社會科學者は、自己の興味に引きずられこの制限を忘却する傾向がある。社會現象の悉くが量で表現出來るやうに盲信する。ここに數理經濟學者の誘惑があり且つ陷穽があるのです。』

ロリア教授はその頭腦中に雲の如く湧き起る豐富な思想を充分表現するには、自己が今使用しつつある外國語が餘りに不完全なることを憂へられしか、或は東洋の一角より社會學教授を名乘り來れるこの若き一日本人の經濟學に於ける理解力を試みんためか、小生に教授が今言ひ了はられたところを言つて見るやう求められ候。小生が英語にて今書きし通りを述べしところ、我意を得たと言はん計りの微笑を片頰に漂はし語り續けられ候。

『數理經濟學派には殆ど將來がないと斷定しても、餘りな暴言ではないと思ふ。御覽なさい。パレト氏が逝かれた後に誰がパレト教授の衣鉢を受けて數理經濟學の堅壘を守りますか。パンタレオニ教授が純理經濟學を發表されてから既に二十年、併し同教授自身の學說が發展しない許りか、これを補佐し、大成を期する後繼者はないではありませんか。後繼者のないのが何よりの證據です。行き詰つてゐる證據です。これは數學に罪がある譯けではありません。數學を充分使いこなし得なかつた、若しくば誤つ

て使用した經濟學者自身の罪です。』

『例へば市場價格の測定に就て考へて見るとする。數學派は市場價格決定の原因をなす無數な現象を數學的に計算し得られるが如く考へる傾きがある。併しこの室の壁にかかつてゐる繪を御覽なさい。これは商品ではありません。美術品です。この美術品に對する評價は全く私の主觀的條件により決定されます。私の人格教養等の內容をなす希望、情緒、享樂度とか云ふ質的分子の分化綜合現象によつて決するのです。この主觀的價値判定の世界には、冷靜な單調な數學は這入り得ません。ここにも這入り込まうとしたのが數學を餘りに重視した一派の經濟學者の錯誤でした。』

『だから數理經濟學派は達す可らざる場所に達しやうとする野望を捨て、彼等が最も有効に數學なる鋤を以て耕し得る原野を開拓するならば、彼等の前途にも未だ光明がある。その原野は生產です。』

ここにて小生は午後四時よりコセンチニ教授に會見する約束あるを想ひ出し候。折角熱し來れるロリア教授の話の腰を折るは禮を失するとも思ひ候も、致方なく話題を轉じ教授の近業につき質問するとともに、學界に於て、教授の經濟學說が、餘りに多量な唯物史觀的色彩を有するを以て、教授を以て社會主義に同情を有する學者なりと認めつつあるが如何と探りを入れ申候。この時教授は、自己の近業はこれだと許り、書架より六百頁に近き大册を拔き出し示され候。この著述は小生が前に揭げし「經濟改革の科學的基礎」と言ふイタリーにて書かれし著述にして、昨年當トリノ市の出版業者 Bocca より出版したるものに候。この著述の內容に就て教授は左の如く語られ候。

『私は、今しがた數理經濟學派に屬すと稱せられる教授達、特にローマ大學のパンタレオニ教授の訓育を受けたる若き人達が、開拓す可き荒野は生產であると言つた。或人は社會主義的經濟學が重要視す可き經濟現象は生產現象に非ずして、分配過程であると言つた。社會主義が社會正義の觀念を象徵するものなれば、その社會正義は分配の公平であらねばならぬと言つた。併し私は數理經濟學卽ち人類の驚く可き文化所產である數學なるものを、經濟現象に應用す可き場所を生產過程であると言つた丈け、私自身も人が私を社會主義的傾向を有する經濟學說の抱持者であると認めてゐるに拘らず、全力を生產現象の研究に傾倒したのである。私の生產過程研究は十年以上も續いたであらう。「如何にすれば生產を增加し得可きか」、と云ふことを片時も頭から放さなかつたのである。』

『十年研究の結果到着した結論は、生產に關する經濟法則なるものが、生產妨害の因をなして居ると云ふ發見であつた。御承知の如く、傳統經濟學は經濟活動の第一動機を利己心に置いた。この點は今日と雖も誤つてはゐない。傳統經濟學が英國第三階級の哲學として生れ出てから旣に百五十年に近い、その間幾多の新經濟學說を稱するもの出現して、あらゆる方面からこの傳統的古典的經濟學說を攻擊したが、その多くは所謂「かすりきず」で骨に達してゐない。利己心、自己の利益を追及して止まない本能的衝動これが生產の動力であると共に生產增加の妨害をなして居る根本原因である。』

『かやうに論じて來れば、この研究結果は、何も新しい發見とか創見とか言ふ可きほどのものではない。近世經濟學の父である Adam Smith の舊說を蒸し返す丈けである。そこで本當にこの新著の特色をなす點は、その利己心は獨り資本家のみが所有するものでなくして、勞働者も亦利己心卽ち自己の利益の追及のために生產に從事してゐると云ふことである。多くの社會主義的文獻は、悉く現代に於ける生產動機は資本家の利潤追及にあり、生產制限は資本家が利潤を增加せんとする手段であると言つて、資本家のみを責める點に於て一致してゐる、然し今日の勞働者も生產制限を欲してゐる。勞働者だとて自己の利益を增大するためには生產を制限すること、資本家と少しも違ひはない。短言すれば資本家と勞働者と心理的に正反對のやうで、その實利己心滿足と云ふ共同目的のために生產制限を敢てしてゐるのである。』

『生產の增加は技術の改良丈けでは駄目です。物質的改良丈けでは駄目です。精神の改造が主だ。』

小生は教授の熱心なる說明に引き入れられて、その要旨を書き取ることさへも忘れ候。今探錄したるところが、教授の意味を充分に汲み取りしや否やを疑ひ候も、教授の頭腦中に發酵したる思想が、教授の唇の間より洩れる英語と少し許りの佛語との綴りをなしたる音波と化し、それが教授の靜かなる書齋內の空氣中に幾旋廻かを試み、小生の鈍感なる聽神經を刺戟し、更に「意味」として小生の貧弱なる腦味噌に印象されたるところは以上の如くに候。小生は教授の近著を讀む暇なきを告げ、これに對する學界の反響ありしや否や、若しこれに對する批評が英・獨・佛語にて發表されたるものあれば、せめてそれなりと讀みたき旨を語りたるに教授は左の雜誌に力强き批評ありしを教へられ候。

The Economist of London, September 30, 1922.

小生は餘りに多く教授の貴重なる時間を費すを恐れ、且つ午後四時よりのコセンチニ教授との會見を考へ、話しを早く切り上げんとしたるも、教授は油の乘りたる恰好にて小生に切り上げる機會をあたへず、話し續けられ候小生は嘗て讀みたるグロパリ教授 (A. Groppali) の著「社會學綱要」"Elementi di Sociologia" の第一章中に現代社會學の諸學派を記述し、ロリア教授をマルクス (Marx) エンゲルス (Engels) と同じく、經濟學的社會學者としてその中に入れありしを記臆より呼び起し、今日イタリーに於ける社會學者は、教授以外に何人ありやを問い候。教授は苦笑して、社會學者として特に擧ぐ可き者なし。强いて擧ぐるなれば、イタリー經濟學者の全部を指名せねばならぬと巧に逃げられ候。そこで小生は短刀直入、ロザーヌ大學教授なりしパレト (Paret) の社會學的文獻「社會學」は如何に評價されるやと稍露骨なる質問を發し候。

『パレト教授は尊敬に價する獨創的思索家でした。特に經濟學上の力作はそこに私と見

點の相違や、方法論の相違はあつても、何時までも經濟學史上特筆す可きものだと確信します。然しながら、パレト教授の社會學に關する著述は、パレト教授が經濟學上に樹立したる地位と名聲とを高めるものではありません。私はあんな本を出版されたことをパレト教授のために惜しみます。上下二卷一五〇〇頁の大册の内容には何等の統一がない。何等の體系がない。全然百科全書的である。あんな著述は新聞記者か或は代議士のペンに依つてなされたら成功でせう。併しあの深遠な思索家パレト教授の如き人がなす可きものではない。』

教授は小生の切實なる希望に動かされて、イタリーに於ける若手の社會科學教授中有望なるものとして、左の人人を擧げられ候。その氏名と所屬大學と小生が現在知れる範圍に於ての其の主要著書とを左に列記致すべく候。

（註）イタリー旅行途上ホテルの一室で執筆中なれば充分に文獻を見る能はず何れ巴里の圖書館にて充分調査の上訂正增補せん

一、Michels（ミケルス）（Roberto）ス井ス、バーゼル大學經濟學教授。この教授はドイツ系イタリー人で十年許り當トリノ大學經濟學自由講座教授としてロリア教授の指導を受けし人、昨年前掲大學に轉勤した。社會主義に關する著述論文が多い。社會學上の著書としては『應用社會學の諸問題』（Problemi di Sociologia applicata 1919）がある。然しこの人の力作は昨年發表した大作『貧窮增加に關するマルクスの理論』（La teoria di Marx della miseria crescente）であらう。舊著としては「イタリー社會主義運動に於ける無產階級と中產階級」（Il proletariato e la borghesia nel movimneto Socialista italiano 1908）と稱する面白い著がある。マルクス研究家としてイタリー經濟學者中の出色である。ロリア教授を日本の河上肇博士に比すれば、ミケルス教授はさしづめ櫛田氏藏學士に相當しよう。

同教授に「政黨の社會學」と言ふ不朽の作があり、且つその英譯もあることは周知の事實であらう。又「性道德」に關する本もあるが絕版になつてゐる。

二、Niceforo（ニチエフォロ）（Alfredo）同氏はイタリー官立大學中社會科學に於て最も有力なる大學として知られるナポリ大學（Napoli）統計學正教授で、同大學經濟學正教授グラチアニ教授と相竝んで光つてゐる。「イタリー社會學評論」の編輯執筆者である關係上、社會學者としてもイタリー以外の國の學者にも相當知られてゐるが、氏の社會統計學上に於ける貢獻は、米國の Mayo Smith の "Sociology and Statistics" に比す可きものだと噂されてゐる。一九一一年に出版した「パリ」と題するパリ市の人口を論じた統計的研究がある。これは佛譯になつてゐたやうに記臆する。一九一九年に「生命の測定、自然科學、社會科學及び藝術に對する統計方法の應用」（La misura della vita. Applicazioni del metodo statistico alle scienze naturali, alle scienze socioli e all, arte）と言ふ大作がある。舊著としては「北部イタリー人と南部イタリー人」（一九〇一年）と云ふ人類學的研究もあり、又「勢力と富」（一九〇六年）と云ふ地文學的研究もあるが、惜しいかな共に絕版である。同氏は一種の文章家で、且つ讀書力の豐富なことは、著書に於ける參照文獻の數でも解る。ロムブロソー教授の弟子の一人で刑事人類學より統計學に入つた人である。

三、Dalla（ダラ）Volta（ヴォルタ）（Riccardo）同氏はフローレンス市（イタリー語ではフィレンツェ）のチェサレ・アルフィエリ社會學學校（R. Istituto di Scienze Sociali cesare Alfieri）の經濟學教授であると同時に同學校の校長である。同學校は英傑ガルバルヂーの親戚に當る一特志家の寄附によつて建設された私立高等專門學校で、社會科學のみを教授し、且つ校名に社會科學なる文字を附したものとしてはイタリーに於てただこれ丈けである。同校の講座を調査して見たところ稍新設東北帝國大學法文學部の講座と類似せる感じがする。同校教授は他の官立大學のそれと比較して更に遜色がないと云ふのが定評である。

同教授には澤山な著書があるが、私の手許にあるのは左の本丈けである。然しこの本が同氏の chef d'œuvre であることは疑はない。

「過古及び將來に於ける經濟學の諸問題」（Questioni economiche di ieri e di domani）八百頁に近い著述で、經濟學上の殆ん總ての問題に觸れてゐる。

四、Einaudi（エイナウヂ）（Luigi）同氏はイタリー上院議員で且つトリノ大學の財政學の正教授である。ロリア教授と相竝んで、經濟學に於てトリノ大學の堅壘を守護し、ローマ大學を威嚇しつつある最も有力な學者である。同氏の著書は極めて難解だとの評がある。

五、Jannaccone（ヤナコネ）（Pasquale）同氏はトリノ大學統計學教授である。ローマ大學のヴェニニ教授、ナポリ大學のニチェフォロ教授と相競つてゐる人である。生產價格に關して重要なる研究を發表した人だとロリア教授は言はれた。

六、Flora（フロラ）（Federico）同氏はイタリーに於ける、否歐洲に於ける最古の大學であるボロニア大學（Univ. di Bologna）の財政學正教授である。同氏には「財政學原理」と稱する代表的著述がある。何處の大學の法學部圖書館に行つても、フロラの財政學は教科書或は主要參考書として二三册揃へてある。

七、Arias（アリアス）（gino）同氏はイタリー大學中第二流の最上位を占むるゼノヴァ大學（Univ. di Genova）の經濟學正教授である。同教授の最も得意とするところは商業學で、これに關する同氏の「原論」は最も廣く讀まれてゐる。

以上はロリア教授が擧げられたる新進經濟學者の顏振にて候。この人人には相當多量な著述ある可きも、圖書館に行く暇なき現在のあはただしき旅行生活なれば、著書の題目、內容及びこれが檢討批評等の記述は到底望み得られざるところに候間、この位で御許し下されたく候。何れ何處かの完備した圖書館で、充分精査した上、完全な著書目錄を作り上げ追補致すべく候。

—未完—

雜錄

レヴィー教授からの來信

昨年三月その夫人と共に學賓として本學が迎へたフランス大學教授シルヴァン・レヴィー博士は、最近本頁挿入の同大學寫眞に沿へて左の如き書を本學宮島教授に寄せられた。たまたま過般パリ滯在當時親しくその私宅を訪ふた本學岩崎教授のレヴィー教授訪問記と共に、左に掲載する。

Paris, le 21 février 1924

Mon cher collègue,

Vous m'avez demandè le 2 août dernier quand j'ètais arrivè à Kyoto si je pouvais vous communiquer une photographie du Collège de France. La voici qui vous arrivera presque après une année entière. Elle vous attestera du moins que je n'oublie pas, que nous pas oublié le charmant accueil que nous avons trouvè à Osaka. Oh! malgré la pluie qui faisait rage quelle heureuse journèe nous avons passèe avec vous et vos aimables collègues le 11 mars à Tsuruya et au Bunrakuza où ma femme avait la joie de rencontre Madame Miyajima.

Nous avons eu ces jours-ci l'occasion d'en renouveler le souvenir avec M. Iwasaki qui doit vous porter nos amities pour vous et tous vos de Kansai.

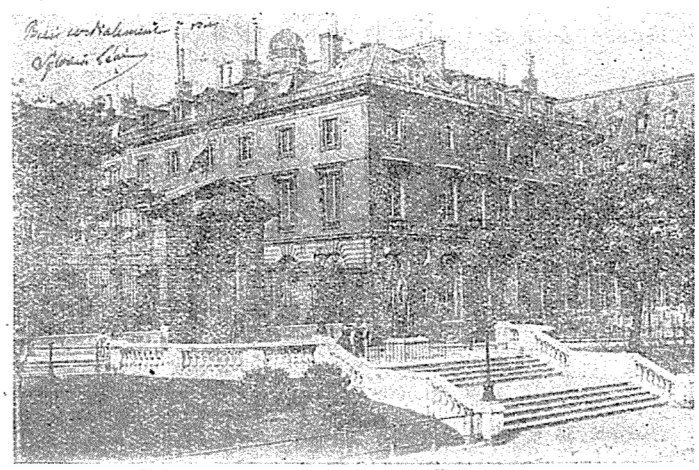
Bien cordialement à vous,

SYLVAIN LEVI.

右抄譯

昨年八月再び京都に歸着致候節貴下より我フランス大學の寫眞御入用の旨御申越相成候約一個年後の今日同寫眞拜送仕候。斯く遲延致候へ共之を以て貴地にて蒙り候御款待を忘るべくも候はず候感激の一端とも御思召被下度願上候。昨年三月十一日豪雨を冒してつゝる家及び文樂座に御佳招を辱うし貴下並に貴下の御同僚各位と共に樂しき一日を過し殊に文樂座に於ては荆妻の相手として態態御令閨御出掛け被下候等玆に更めて御厚禮申上候。

幸ひにも兩三日前岩崎教授御來訪被下前陳のこと共を談合するの機を得て更に新に感激を覺ゑ申候。尙ほ同教授は小生並に荆妻よりの敬意を貴下及び貴學各位に御傳達下さることと奉存候　敬具



レヴイー氏が教鞭を取りつつあるフランス大學

シルヴァン・レヴィー教授を訪ふ

關西大學教授　岩崎卯一

サンミッシェル通の角のリブレール・ウニヴァシテールで、コレージュ・ド・フランスの公開講義の時間表を買つた時、私の目は先づ第一に哲學教授ベルグソンの名を探し求めたが、同教授は目下引退して靜かに思索と冥想に耽つて居られたので、殘念ながらその名を見出すことが出來なかつた。然し計らずもそのキャタログの中にシルヴァン・レヴィー教授の名を見出したので、私は早速懷に手を當てて見た。故國を立つ時宮島教授から戴いた同教授への紹介狀を落しはしなかつたかと氣づかつたからである。宮島教授からの紹介狀が、自分のポケットに收まつてゐることを確めるや否や、私は直ぐさまコレージュ・ド・フランスに駈けつけた。その日は水曜日で、てうどレヴィー教授のサンスクリットに關する講演の時間のある日であつたからである。

コレージュ・ド・フランスの薄汚い玄關をくぐると、ル・シャンブル・ツロアの六疊敷位の小い部屋から、聞き憶ゑのあるレヴィー教授の鼻聲が、懷しく私の耳に響いて來た。直ぐにも飛び込まうかと思つたが、若し邪魔になつてはと思つて、先づドアの間からのぞいて見ると、昨年大阪でいやと云ふ程馴染になつたレヴィー氏の顔と、この顔を取り卷く二三の皺くちや婆さんと、同じく二三のユダヤ人らしい青年とが見受けられた。

講義の濟むのを待つて、外に出て來る教授を捉へ、いきなり宮島教授の紹介狀を出して、『關西大學を御記憶ですか』とぶつきら棒に訊ねて見た。するとレヴィー氏は流暢な英語で、

『關西大學どころか、鬱陶しい大阪の天氣、厭やな道路、美しい文樂座、私も家内も忘れて呉れと言はれても忘れられぬ』と答へて、私の手を痛い程握りしめた。

呆氣にとられてゐる學生連に、一一私のことを『この方は大阪の關西大學の教授で、私が昨年非常に世話になつた大學から來られたのです』と紹介した。

尙ほレヴィー教授は、『土曜日の晩には私の家に珍しい人達が澤山集まるから、これ等の人達に貴學の御好意も傳へたく、又家内も人さへ見れば、關西大學と文樂座のことを言つてゐるからどんなにか喜ぶでせう。是非來て下さい』と名刺に住所を書いて渡された。

土曜日の晩に、私は約束通りレヴィー教授の私宅を訪問した。かなり判りにくい場所であつた。ドアを排し、案内を請ふて這いつて行くと、そこに十四五人の佛・獨の紳士と二人の日本人とが茶を飲んでゐた。

レヴィー教授は早速飛んで來て、私には英語で、他の人には佛語又は獨語で、それぞれ紹介の勞を取られた。それ等の人人は、何れも宗教學、民族學、社會學、言語學等のその道の權威で、中には寫眞で見憶ゑのあるフランスの社會學の泰斗、ヅルケーム教授の鬚面にそつくりな、その甥のモース教授も見受けられた。話はレヴィー教授を中心として、日本の神代に於ける風俗に及んだが、特に日本の盆踊の起源と謂はれる奈良朝時代の歌垣が、

多くの人人に依つて、如何にも興味ありげに語られてゐるのを傍で聞いてゐて、日本から來た私は少からず度膽を抜かれた。

部屋の中を見廻したところ、支那の佛畫、日本の浮世繪等が、漢和大辭林とか佛教大全とか云ふ一寸フランス人の持ちさうでない書物の間に、笑つたりしかめ面したりして列べられてあつた。尙ほよく室内を見廻したところ、日本の書物だけでも約千册位蒐められてあるのに少らず感心した。

更に、レヴィー教授の日本の古代美術に關する話が始まつて、未だ日本を見ない他の客人方の興味を少らずそそつたが、それ等の人人が『日本へ行つても、フランス語一天張ではまるで啞の旅行であらう』と、かなり心細ささうな顏をしてゐるのを見て、教授は『日本へ行つても、大阪・神戸なら、關西大學の宮島さんや賀來さんが居られるから大丈夫だ。殊に賀來さんは風采から顏容までフランス人そつくりで、少し離れて見ると容易にフランス人との見さかいがつかぬ程だ』と語り、尙ほ『面白いものがある』と言つて取り出して來たのは、意外にも千里山學報であつた。何をするのかと見てゐると、その中からレヴィー教授夫人が、文樂座で人形を抱へてゐる寫眞を示して、長い間人形芝居の講釋をせられた。他の人人は、その千里山學報を次から次に廻して、表紙の英字や、頁の中に所所挿んである横文字に一瞥を呉れて、判つたやうな顏をして眺めてゐた。かくて再びお茶の御馳走になつて辭し去つた。

長谷本學指定洋服店主の歸朝

昨秋以來本學の囑託として學位服、教授服、學生服等に關する調査研究のため渡歐中であつた本學指定洋服店主長谷爲五郎氏は、前號豫報の通り三月二十九日朝神戸入港の香取丸で無事歸朝した。

新刊紹介

Charles A. Beard: Economic Basis of Politics.

本書は、先年東京市政調査會の顧問として來朝し、又昨年震災後再び渡來して帝都復興計畫に對してその意見を開陳した有名な米國の政治學者ビアード博士が、嘗てアマスト大學に於て行うた講演である。

四講より成る。第一講「諸思想家の學說」に於て、著者は先づ、政治家の常に攻究すべき根本問題は財産の形式と分配及び財産の差異より生ずる感情と意見なりとなす六大思想家――アリストートル、マキアヴェリ、ロック、ハリントン、ウェブスタ、カルフーン――の學說を叙し、第二講「經濟的集團と國家の構造」に於て、過去數世紀間の西歐諸國政治組織が利害を異にする經濟的階級の存在に相應じて居ることを述べて、理論上に於ても實際上に於ても、經濟が政治の基礎なることを論じて居る。第三講「政治的平等の學說」は、ルッソーによつて提唱された近世の平等的デモクラシーの思想が滔滔として世界各國に於ける舊秩序を破壞し、産業革命と共に近世の二大革命とも云ふべき大變化を齎したことを說いたものである。第四講は「矛盾と結果」と題する。到る處普通選擧は實施され、政治的デモクラシーは實現されたけれども、然もそれは經濟的不平等を打破しない。ここに驚くべき政治的矛盾が存在する。然らば社會主義者等の主張はこの矛盾を除き得るであらうか。あく迄も事實を重んずる著者は「革命後に於けるロシアの實際を見るに、共産主義者等の主張は多く單なるゼスチュアでありフィクションであることが明かとなつた。これ近世の二社會に於ては、政治と根本的關係を持つ財産の問題が、古代に於けるそれの如くに、彼等の主張を直ちに實現せしむる程しかく簡單に非ざることを示すものである」と答へ、更に「多數の異なつた利害關係が大社會には必然的に發生し、感情や意見を異にする種々の階級に大社會を分裂せしめる。此等各種の相反する諸利害關係の調節は、財産の形式が如何なるものであらうとも、近代政治家の主要職分を構成する」と結んで居る。

僅か九十餘頁の小著ではあるが、極めてオリジナリティーに富んだ、そしてこれによつて政治史や政治學說史をも一應理解し得るやうに出來た好著である（Y生）

編輯餘錄

▼碩學の生誕二百周年を記念するため、本號をカント號として、カントに因んだものを出來るだけ多く載せやうと思ひましたが、てうど學校の大晦日と云ふやうな時期のことて、思ふ通り材料を蒐め得なかつたことは殘念です。然し新進のカント研究者武内講師の長論文は、それだけで充分本記念號の名を完ふするに足るもので、轉住早早この寄稿を忝ふした同氏に深謝致します。

▼尙ほ後れ後れしてゐる懸賞論文を、頁の都合で本號にも發表出來なかつたことをお詫びします。

大正十三年四月十二日印刷
大正十三年四月十五日發行

大阪市北區上福島北二丁目
關西大學學報局
編輯兼發行人　辰巳經世

大阪市西區土佐堀通四丁目五番地
印刷者　飯田彌之助

大阪市西區土佐堀通四丁目五番地
印刷所　株式會社三有社

大阪市北區上福島北二丁目
發行所　關西大學學報局

不許複製

舊學舍　大阪市北區福島　關西大學　電話土佐堀（一〇四九）（五五七〇）

新學舍　大阪市外千里山　關西大學　電話吹田一二三

定評。
申分なしと好評を給ふ
質AND型
新らし屋帽子店
大阪市北區上福島
淨正橋通（阪神踏切南）
電話土佐堀五七〇五番

外交を省き實價にて提供仕候
大阪市東區上本町九丁目
停留所前
樺山洋服店
電話南六六九番
店主　樺山誠一

關西大學校友ソノ他關係者各位へ

◎千里山學報維持費トシテ、校友ソノ他關係者各位カラ續續多額ノ御出捐ニ預リ有難ク幾重ニモ御禮申上ゲマス。

何時モ申上ゲテキマス通リ、出來ルナラバ毎號無料デ御配付申上ゲルノガ本意デアリマスガ、今ノトコロドウシテモ各位ノ御援助ニ俟タナケレバ、到底發行ヲ續ケテ行クコトノ出來ヌ狀態ニアリマスノデ、遺憾ナガラ不遠慮ニト言フヨリモ寧ロ進ンデ御寄捐ヲ仰イデキル次第、何卒惡シカラズ御諒恕ヲ願ヒマス。

◎尙ホ金額ハ各位ノ御志ニ委セル外ゴザイマセンガ、大體年額貳圓位御寄捐願ヘマスレバ收支相償フ旨申添ヘテ置キマス。

◎最後ニ從來御出捐願ヘナカツタ方ニ、コノ際何分ノ御援助ヲ御願ヒ申シ上ゲマス。ソシテ新タニ御出捐下サル方ハ、御手數デスガ左ノ申込書ヲ御切リ取リ下サツテ、金額ナリ拂込方法ナリ適宜御書入ノ上御送付願ヒマス。從來ハ往復葉書デ御願ヒシテキタノデスガ、餘リ厚ケ間シイト存ジ、カウ云フ方法ヲ選ビマシタ次第デスカラ、郵稅當方拂トシテ御發送下サツテモ結構デゴザイマス。

大正十三年四月

關西大學學報局

千里山學報維持費拂込申込書

貴名

金額

一金

拂込方法

振替貯金又ハ郵便爲替

集金郵便

（何れか一方を抹消して下さい）

關西大學
關西甲種商業
指定

難波洋服店

大阪市西區京町堀上通
電話土佐堀二六三五番

關西大學
關西甲種商業
指定

野島書店
明文堂

大阪市北區上福島北三丁目
電話土佐堀一二八六番
振替大阪三九九九一番

關西大學
遞信局講習所
指定

越前屋洋服店

大阪市外仁大三〇三
但關西南工學校南へ西辻ノ入ル
電話土佐堀二八九三番
本店 東京市早稲田大學前
電話早稲田二七四五番

關西大學御用達

帽子製造業

五十嵐本店

大阪市東區平野町五丁目
電話本局二二八六番
振替大阪二二二三三番

文信社編輯部編

文官高等（豫備筆記口述）外高官領事官判檢事辯護士官私立法科大學出題

最新刊

模範試驗問題集

□三五判七百餘頁（六號活字二段組）
□定價金貳圓●送料六錢

本書ハ嘗テ明治三十年以降大正十年ニ亘ル二十有五年間ノ文官高等外交官領事官判檢事辯護士及官私立法科大學ニ於テ行ハレシ法律學經濟學政治學商業學及之ニ關スル諸種ノ各論政策論文官高等外交官領事官豫備筆記口述試驗等之レヲ五十一部ニ大別シ部ハ更ニ之レヲ編章節款トシ組織的學理的ニ網羅序列シ如何ナル問題ト雖モ本書ニ於テ發見セラレザルナク實ニ受驗者無二ノ寶典ナリ

本書の特色

同一趣旨ノ問題ニシテ二回以上出題ノモノハ之ガ重掲ヲ避ケ上欄ニ＊印ヲ其他總テ吾人ニ重要視セラルル諸資格登用試驗及東西大學出題ニ限リ上欄ニ各其略字ヲ附シテ注意ヲ促ス尚參考トシテ高等試驗委員擔當科目一覽、判檢事辯護士試驗委員一覽、同各科最近四五年間ノ試驗問題一班及同合格者數表等ヲ附シ更ニ卷末ニハ官私立大學出題者索引表ヲ添付シテ引用上ノ便ヲ圖レリ篤學ノ士ニ其一書ヲ薦ム

文信社編輯部編

豫備筆記口述

最新刊

模範高等試驗問題集

□三五判二百有餘頁（六號二段組）
□定價金九拾錢●送料四錢

本書ハ嘗テ明治三十年以降大正十二年ニ亘ル二十七年間ノ高等試驗行政科外交科司法科（判檢事辯護士）等各種ノ國家試驗ニ於テ行ハレタル法律學經濟學商業學外國語（英佛獨）等ヲ細大洩ラサス遍ク集輯シ之レヲ豫備試驗外交科外國語筆記試驗口述試驗等ノ四部ニ大別シ更ニ之レヲ年度分ニ部ハ更ニ之レヲ編章節トシ組織的學理的ニ網羅序列シテ編纂セリ諸兄研究ノ餘暇之レヲ繙ケハ試驗問題ノ那邊ニ潜在セルヤヲ發見セラルベク實ニ斯學受驗者ノ寶典ナリ尚卷末ニハ附錄トシテ最近數ケ年間ノ高等試驗行政科外交科試驗委員擔當科目一覽、同司法科（判檢事辯護士）試驗委員擔當科目一覽並ニ政正試驗規則ヲ附セリ

法律經濟模範便覽叢書

文信社編輯部編

第一編　帝國憲法便覽
第二編　行政法總論便覽
第三編　行政法各論便覽
第四編　民法總則便覽
第五編　物權法便覽
第六編　債權法總論便覽
第七編　債權法各論便覽
第八編　親族相續法便覽
第九編　平時國際公法便覽
第十編　戰時國際公法便覽
第十一編　商法（總則商行爲）便覽
第十二編　會社法便覽
第十三編　海商保險法便覽
第十四編　手形法便覽
第十五編　刑法總論便覽
第十六編　刑法各論便覽
第十七編　國際私法便覽
第十八編　經濟學便覽
第十九編　財政學便覽
第二十編　改正刑事訴訟法便覽
第廿一編　民事訴訟法便覽
第廿二編　法學通論便覽
第廿三編　哲學概論便覽

各冊定價九拾錢●送料四錢

發行所　東京文信社

大賣捌　書肆　巖松堂大阪店
大阪市北區曾根崎上三丁目一五五番地
電話北一六五三●振替大阪三一九七二番

歸朝御挨拶

私儀

昨年十月六日神戸出帆アリゾナ號に乘船歐米各大學視察の途に上り候處爾後カリフォルニヤ、ワシントン、スタンフォード、ミシガン、シカゴ、ペンシルベニア、コロムビア、エール、ハーバート、ケンブリッジ、オックスフォード、パリー、ベルリン、ウィーン、ベルン等約十七校を歴訪し、服制其他に就き仔細に研究の上、去る三月二十九日郵船鹿取丸にて無事歸朝仕候尚弊店專門の紳士服並に兒童服等に關してもその流行、技術、安價提供方等種種研究、見本その他諸材料豐富に持歸り居り、一層各位の御期待に副ふやう努力仕る心算に御座候何卒倍舊の御引立相願度右謹んで御挨拶申上候

米國各大學共通規定ニヨル式服

（ドクター）　（アダンヤー・グラデュエート）

大阪市東區上本町六丁目

關西大學指定　長谷屋號洋服店

電話南四五一二番

振替大阪五五三八番

店主　長谷爲五郎

生氣漲る……四月の三越

子供を中心として、我運動競技界の光輝ある歴史を、貴重なる研究を、最新の智識を、或はその抱負を、理想を、悉く一堂の下に展開し、現實化して、只管興味の裡に斯界の向上發展を促さんとするもの、會場自ら生氣潑溂として誠に體育史上の一大記錄たると共に、また兒童界稀に見る盛觀であります。講演會、各種實演活動寫眞、遊戯等、何れも本會に一層の興趣を添へて、いやが上にも新興の意氣を漲らしめます。

日本子供運動展覽會

一日より廿日まで

主催
大阪市學校体育研究會
大阪市兒童陸上競技研究會

後援
大阪府教育會
大阪市教育會

大阪 三越呉服店